平成24年度神奈川県考古学会講座

主催　神奈川県考古学会

文明開化の考古学

明治末～大正期頃の横浜駅　所蔵 横浜開港資料館

平成２５（２０１３）年3月2日
神奈川県考古学会

開　催　次　第

日　時　　平成２５年３月２日（土）　９：５０～１６：４０

場　所　　横浜市歴史博物館　講堂

開会挨拶・趣旨説明	岡本 孝之 会長	9：50～10：00
講　　座		
1　文明開化と考古学	櫻井 準也 氏	10：00～11：00
2　横浜外国人居留地の外国商館と商人 －山下居留地遺跡の発掘調査成果から－	天野 賢一 氏	11：00～11：40
〈　休　憩　80 分　〉		
3　旧新橋駅の発掘調査について	福田 敏一 氏	13：00～13：40
4　浮世絵に見る文明開化と横浜	桑山 童奈 氏	13：40～14：20
〈　小休憩　10 分　〉		
5　東海道藤沢宿の調査について －第４・第６地点を中心に－	宮田　眞 氏	14：30～15：10
6　横浜生まれのフランス瓦	青木 祐介 氏	15：10～15：50
〈　小休憩　10 分　〉		
質疑応答・討論など		16：00～16：30
閉会挨拶	中村 若枝 副会長	16：30～16：40

文明開化の考古学によせて

神奈川県考古学会　会長　岡本孝之

近代とは何か

近代を考古学的に考えたい。原始、古代、中世、近世、近代と人類の歴史を区分するならば、そして、古代には中世・近世を含んで考えるならば、原始・古代・近代と２転した時代像を考えることができる。人類のあゆみは何百万年もあるが、古代の歴史はせいぜい１万年であり、日本列島では３千年になるかならないかであり、近代は 150 年を超えた程度しかない。

原始から古代の最大の変化、成果は国家の成立であり、弥生時代の成立から 1500 年間ほど経過している。古代から近代への最大の変化の目標は、新しい国家像の形成であると私見をもつ。近代の試みた新しい国家像は帝国主義国家、共産主義国家であったが、いずれも失敗した。まだ 150 年しかたっていない。いま、模索中ということであろう。

考古学は近代の所産

考古学の領域は、原始・古代から始まり、中世・近世へと拡大し、ついに近代も視野に入れた。いわゆる歴史を考える科学で、原始から近代までを視野に入れたのは考古学だけである。考古学は歴史学であるというテーゼを疑うのである。歴史学は原始を論ずることはできないのである。そして、近代を視野に入れた考古学は原始・古代をどう見直すのかが逆に問われるのである。否、縄文文化を知った我々は近代をどう捉えるのかが問われているのである。

近代を考古学的に考えることは、まだ始まったばかりである。宮ケ瀬遺跡群で近代遺物が発見されたことを契機とするならば、まだ 30 年に満たない。神奈川県考古学会では２回目の近代を問う考古学講座である。

平成24年度神奈川県考古学会考古学講座（2013.3.2）

文明開化の考古学

櫻井準也
（尚美学園大学）

内　容

- かながわの近現代考古学の動向
  - 最近１０年の近現代考古学の流れ
- 文明開化とは何か
  - 文明開化とは
  - 文明開化のイメージ
- 文明開化と考古学
  - 近現代考古学の現状
  - 文明開化（近代化・西洋化）と考古学
    - 時間軸・空間軸でとらえる、インフラの整備
  - 西洋化されないもの
- 近現代遺跡の課題
  - 近現代遺跡調査の意義
  - 近現代遺跡の保存と活用

最近１０年の近現代考古学の流れ

2004年　神奈川県考古学会『考古から近世・近代のへのアプローチ』（講座）
2005年　横浜都市発展記念館『地中に眠る都市の記憶　地下遺構が語る　明治・大正の横浜』（展示）
2006年　野内秀明「神奈川の遺跡調査をめぐる30年　近代」『第30回　神奈川県遺跡調査・研究発表会』（発表）
2007年～2012年　坂上克弘・青木佑介「横浜の近代遺跡と出土遺物　その１～その４」『横浜都市発展記念館紀要』（論文）３・４・６・８号
2010年　かながわ考古学財団『山下居留地遺跡』（報告書）：調査2007年～2008年
2012年　かながわ考古学財団公開セミナー『発掘された横浜外国人居留地』（講座）
2013年　天野賢一「近代・現代の動向」神奈川県考古学会『神奈川の考古学・最近の動向』（講座）

文明開化とは

- 文明開化
  人知が開け、世の中が進歩すること。特に明治初期の近代化や欧化主義の風潮を言った。　『広辞苑第５版』

  「じゃんぎり頭をたたいてみれば文明開化の音がする」

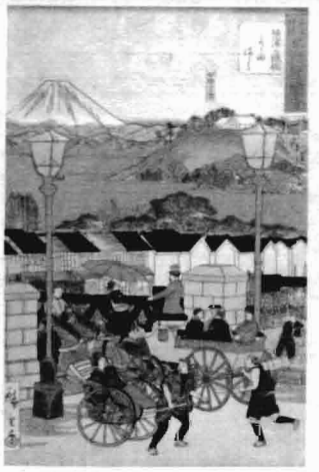
岡蒸気と蒸気船（横浜）

- 文明開化＝近代化をどうとらえるか
  西洋化・都市化・工業化・国家の台頭
  近代的思考の確立

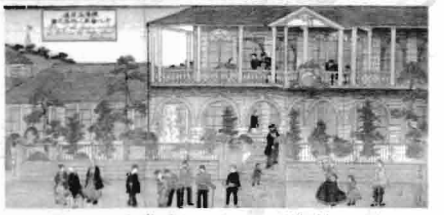
  近代思想：事象化・合理性（計算可能性）
  近代的時間観念：円環的時間から直線的時間へ
  進歩の概念：ダーウィンの生物進化論、スペンサーの社会進化論

大井牛肉店（明治村）

文明開化のイメージ



吉田橋（横浜）



海岸通りのホテル（横浜）

イギリス大使館（横浜）

近現代考古学の現状

- 近現代考古学の台頭と停滞

  近現代考古学：1990年代半ば以降注目されてきた考古学の一分野

  産業考古学（1970年代以降）や戦跡考古学（1986年以降）のイメージ

  近現代遺跡・遺物の定義の難しさ

  2000年以降の近現代遺跡の発掘調査事例の減少

  →1998年文化庁通知『埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について』

  →近現代考古学の意義の提示、目的意識をもった調査・研究の必要性

- 近現代考古学研究の方向性：生活史研究としての近現代考古学

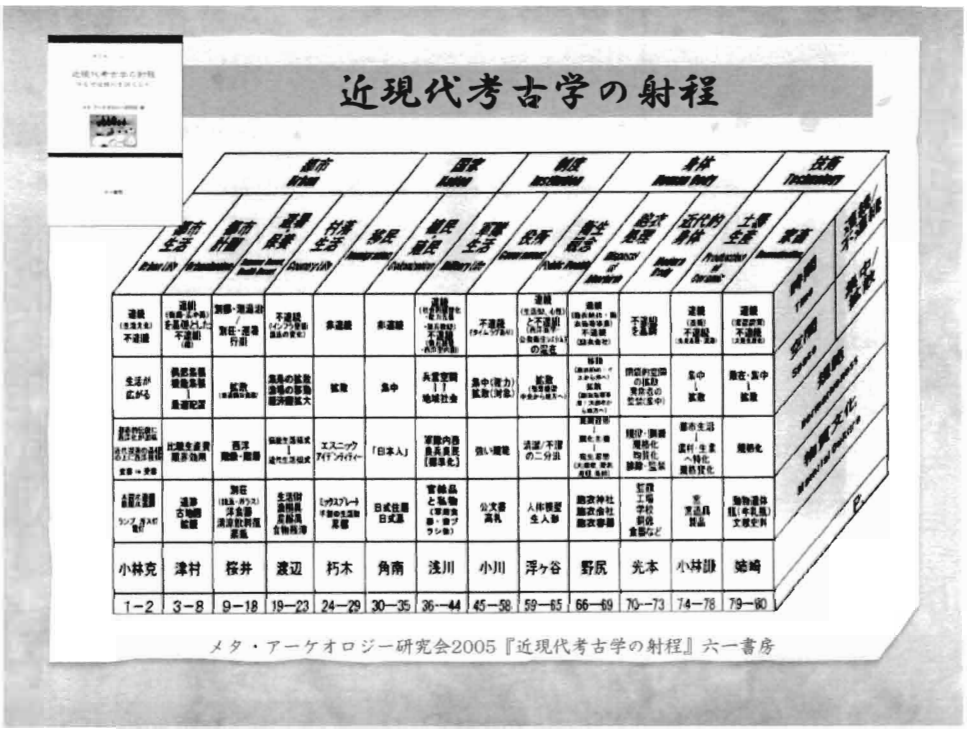
  ①文献記録の乏しい地域あるいは記録を残さなかった階層の人々の生活を発掘資料を用いて復元する

  ②発掘された遺物群やその組み合わせ（アセンブリッジ）の変化から、その地域や特定集団の生活様式の変化（近代化や西洋化）の様子を読み取る

  ③遺物の廃棄行動やライフサイクル、使用痕の分析などから過去の人間行動の復元を試み、人とモノとの関係を明らかにする

  ④学際的な研究に心がけることにより、他分野や一般社会に対して考古学の存在とその有効性を訴える

（桜井準也2004『モノが語る日本の近現代生活』慶應義塾大学出版会）



文明開化（近代化・西洋化）と考古学

- 考古学＝物質文化研究（モノ研究）

  多様な調査法

  発掘調査・資料分析・文献史料調査・絵画資料調査・写真資料調査・民俗調査（他分野との連携）

- 時間軸：連続性と不連続性

  連続性　水道の建設工法（江戸・東京）　木樋→鉄管

  加茂式水道は明治32年（1899）以降

  蠟燭産業（建物基礎）

  不連続性　挑戦（鉄道・ガス灯・煉瓦建物）

  技術（トラス構造）

  食習慣（肉食・西欧料理）

  伝統技術の転用・新たな技術の誕生

  擬洋風建築・土蔵・ジェラール（フランス）瓦

- 空間軸：集中と拡散

  集　中　都市化（人口集中・施設集中）

  拡　散　交通網・流通網（鉄道・道路）

  インフラ整備（電気・ガス・水道）

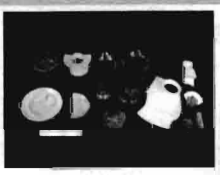
山下居留地遺跡（横浜市）

第二横浜駅（横浜市）

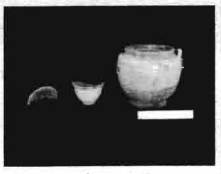
時間軸でとらえる：漁村の文明開化

層位	時期	縄文土器	古墳時代	近世	明かり	化粧	子ども
表土	戦中～昭和30年代	手縫ト、型紙原ト、編目転ト、ヘラ状沒、ゴム版紋付、キムト、スクリーン転写		○	ランプ、火鉢、電球、電池、鉄子	化粧水類、化粧クリーム類、稀油類	子ども茶碗、大鉢、プラスチック製玩具、ビー玉、おはじき、ファミコンカセット
1層	戦中	手縫ト、沒紋型紙原ト、編目転ト、ゴム版紋付			火鉢、電球、電池	化粧水類、化粧クリーム類	子ども茶碗、ニッキ水飴、鉄製玩具、ビー玉、おはじき、石鹸ケス
2層	昭和前期	手縫ト、型紙原ト、編目転ト、ヘラ状沒、ゴム版紋付	○		ランプ、火鉢、電球、鉄子、笠	化粧クリーム類、雪	子ども茶碗、ニッキ水飴、ビー玉、おはじき
コハ層	大正末～昭和前期	手縫ト、型紙原ト、編目転ト、ヘラ状沒、ゴム版紋付	○		火鉢、鉄子、電球、笠	化粧水類	子ども茶碗、ニッキ水飴、ビー玉、おはじき
コイ層	大正後期	編目転ト			石油ランプ、火屋、笠		ニッキ水飴、おはじき
4層	明治末～大正	手縫ト、型紙原ト、編目転ト、ヘラ沒	○		鉄瓶、行燈皿、行燈笠、行燈芯、鉄付石鹸皿、火屋、笠	白粉皿、油壺、化粧水類、櫛	おはじき
5層・土坑1	明治30～40年代	手縫ト、型紙原ト、編目転ト	○		鉄付石鹸皿、火屋、笠	油壺	子ども茶碗、おはじき、石鹸ケス
6層	明治30～40年代	手縫ト、型紙原ト	○		火屋、笠		おはじき
7層	明治20～30年代	手縫ト、型紙原ト、編目転ト	○		行燈皿、鉄付石鹸皿、火屋、笠		
8層	明治20～30年代	手縫ト			火屋	鉄製櫛	
土坑2・3	明治20～30年代	手縫ト、型紙原ト	○		行燈皿	鉄製櫛	
9層	明治10年代	手縫ト、型紙原ト	◎		火屋		

ヤキバの塚遺跡出土遺物（三浦市松輪）



灯火具



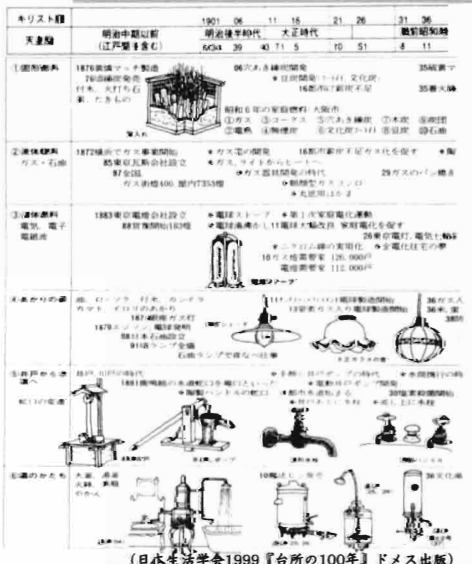
お歯黒道具

油　壺

ウマの橈骨

インフラの整備

キリスト暦		1901	06	11	15	21	26	31	36
天皇暦	明治中期以前（江戸期を含む）	明治後半期代		大正時代				戦前昭和時	
		60M	39	40	T1	5	10	51	4	11



（日本生活学会1999『台所の100年』ドメス出版）

光　源

明治初年

行灯・燈台＝灯油（菜種・綿実の搾り油）

燭台・提灯＝和ろうそく

ガス灯の登場（大都市や開港場）

街灯　明治５年（1872）横浜

明治10年代　ランプの普及

電　灯

明治２１年（1888）東京で電力供給開始

明治末～大正初期に急速に普及する

大正２年（1913）：全国戸数の約１／３

熱　源

明治初年　薪・炭使用（竈、コンロ、七輪、火鉢）

既成市街期～大正期　都市で電気を熱源に

熱用ガス（都市ガス）

明治３２年（1899）熱用ガス利用始まる

昭和５年（1930）以降、都市ガス普及

水　源

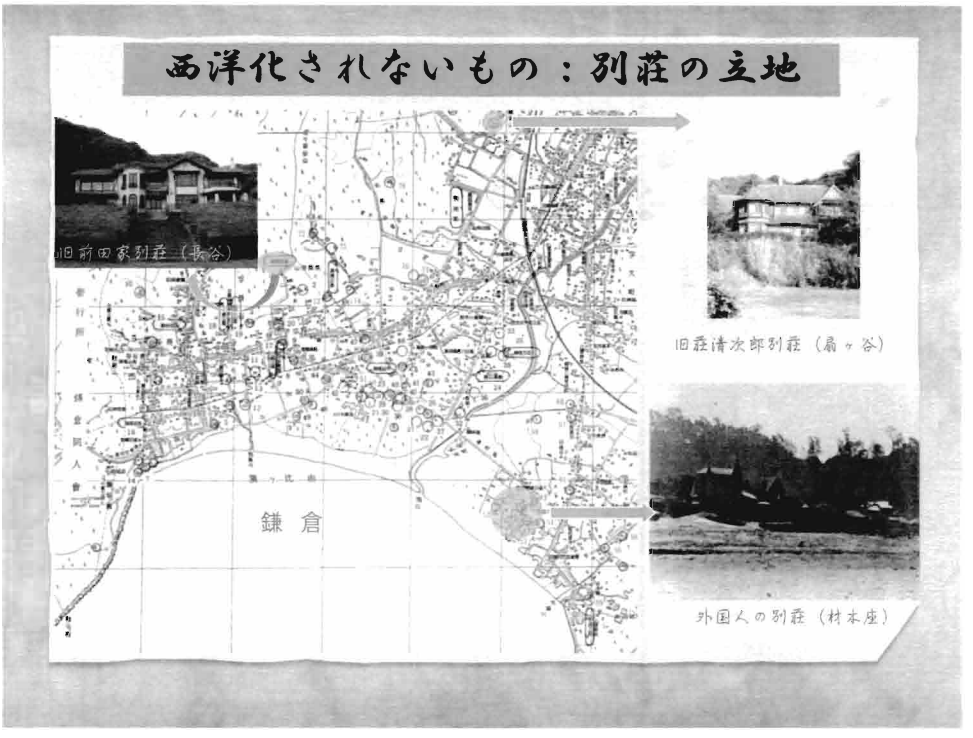
湧水・汲水・井戸　水汲みの時代

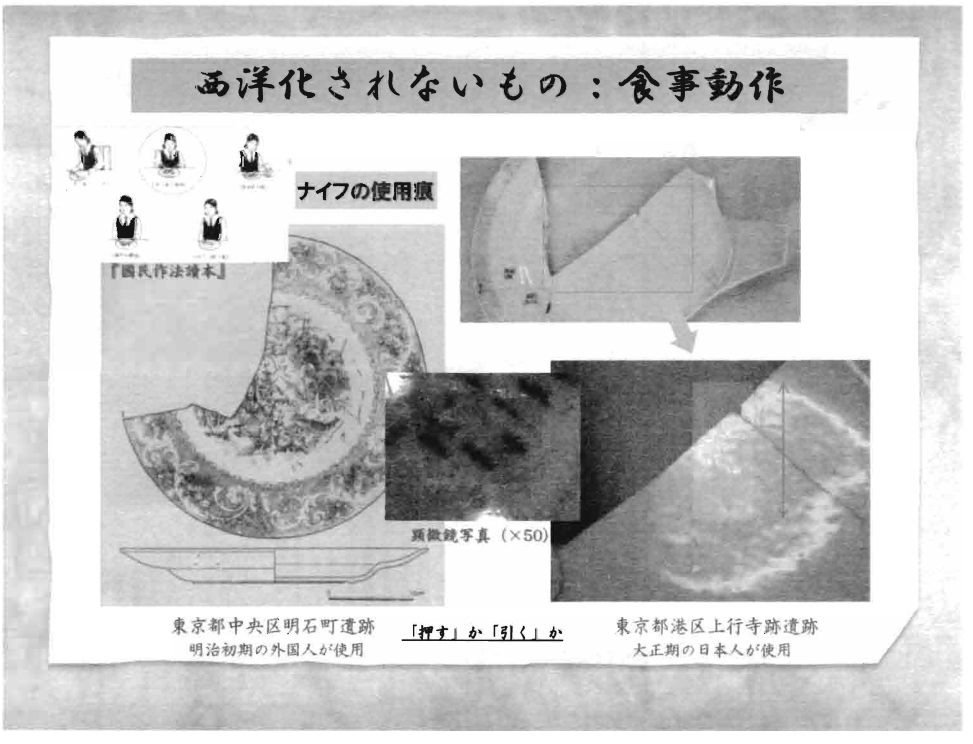
上下水道（共同栓から個別給水へ）

明治２０年（1887）神奈川県新水道（横浜）

大正５年（1916）給水戸数全体の３．６％

共同栓利用が５６．８％


西洋化されないもの：別荘の立地
旧前田家別荘（長谷）
鎌倉
旧森清次郎別荘（扇ヶ谷）
外国人の別荘（材木座）


西洋化されないもの：食事動作
ナイフの使用痕
『国民作法讃本』
顕微鏡写真（×50）
東京都中央区明石町遺跡
明治初期の外国人が使用
「押す」か「引く」か
東京都港区上行寺跡遺跡
大正期の日本人が使用

近現代遺跡調査の意義：地域の「記憶」を呼び起こす

宮ヶ瀬遺跡群（長福寺址）出土の西洋遺物

横浜周辺外国人遊歩区域図（1867or1968）

近現代遺跡の保存と活用

- 近現代遺跡（遺構）の保存
  何をどう残すか
  どのくらい残すのか

- 近現代遺跡（遺構）の活用
  歴史教育の場として
  地域住民の学習の場として
  「近代遺跡めぐり見学会」（よこはま洋館付き住宅を考える会）
  「近代化遺産見学会」（全国各地）
  まちづくり・観光資源として
  キーワード：場所性・真正性

山下居留地遺跡の屋外展示（横浜市）

サムエル・コッキング苑の温室遺構（藤沢市）

発掘された横浜外国人居留地

―山下居留地遺跡の成果と課題―

公益財団法人かながわ考古学財団　天野　賢一

1．はじめに

「文明開化の考古学」にあたって、横浜はその舞台となった中心地である。横浜開港以降、波止場からはたくさんの人とものが到来し、列島各地に急速に拡散していき、情報伝達の速さは驚くべきものがある。また西洋文化も日本では必要なものは速やかに受け入れていった様子が流通したものによってわかる。横浜外国人居留地は異文化交流の接点として、現在までその姿と形を変えながら続いている。その一端が明らかとなった山下居留地遺跡の様相についてみてみたい。

2．遺跡概略

遺跡は、安政6年(1859年)横浜開港に伴い建設された横浜外国人居留地にあたる。居留地は、山下(関内)地区及び山手地区にあり、特に山下町一帯は日本の近代化に大きな役割を果たした外国商館が多数建設された区域である。この地域は大正12年(1923年)の関東大震災により甚大な被害がもたらされ、居留地のほとんどの建物が倒壊している。その後の復興事業により区画整理が行われ、現在の姿に近い市街地の区画が形成されている。

調査区は、幕末から明治時代の地番による主な商館は、48番地(モリソン商会)・54番地(イリス商会)・55番地(コッキング商会)と53番地及び駿河町通りの一部が該当する。

3．さまざまな出土遺物

横浜外国人居留地では初の本格的な発掘調査となった山下居留地遺跡からは予想をはるかに超える成果を得ることができた。

山下居留地遺跡空中写真

舶載遺物について

陶器磁器類では、イギリス・オランダ・中国産の食器類が出土している。西洋食器類の美しい絵柄と色合いは現在でも魅了されるものである。

ガラス瓶やボトル類は極めて多量に出土しており、商館での自己消費のみではではなく、流通段階のものも多く含まれていると考えられる。

特徴的な出土遺物はコッキング商会が所在していた55番地からはハッカ瓶が出土しており、ハッカ精製を行っていたことを裏付けるものである。また薬品容器と考えられるガラス瓶も同敷地の廃棄土坑から出土している。

その他、保温機能を有した食器類なども興味深い資料であり、各国の文化をそのまま持ってきている様子が把握できる。

写真用品とされる器類は、黎明期の写真技術史を把握する上でも重要なものと思われる。

喫煙具のクレイパイプは総数106点が出土しており、国内では長崎出島に次ぐ出土量と思われる。

白色粘土素材のもので、人面・動物・植物などの装飾が施されている。「木の枝」形のパイプは類例があり、オランダ産である可能性が考えられる。「TD」などの刻印が施されており、由来を把握できるものもある。

金属製品では、硬貨や缶などがある。缶はイギリスの製造所名などの刻印があり、赤色塗料の容器であったと考えられる。

その他の出土遺物

国産陶磁器類では、幕末・開港期では近世遺物が圧倒している。貿易拠点であることから、各産地のものが流通していたことが伺える。淡路焼きの系譜である珉平焼の鮮やかな器類やノリタケ製の食器も各種が出土しており、裏印での変遷が捉えられる。

4．まとめ

開港以降の遺構から様々な遺物が出土している。居留地時代の建物跡や多数の遺物、道路・下水施設・鉄管等などの施設が発見され、横浜居留地の一端が具体的に明らかとなった。特に幕末以降から震災時までの建物は重複が激しく、居留地での盛んな貿易活動を裏付けるものである。

遺構の変遷をみると開港後、最初に建てられた建物は礎石建物で、幕末の大火を契機に切石積や煉瓦積の建物に建て替えられていったことが把握できる。震災後、鉄筋コンクリート製となり、現在に至っている。

これら遺構や遺物について、考古学的な側面から多くの情報を得ることができるが、近代という特性から内容は多様性を極めている。出土品の多様性は分野の多様性であり、それぞれが密接に結びついている。研究分野や領域の枠組みを超え、多角的な視点から検討していくことによりさらに多くの課題が明らかになるものと思われる。

近代遺構と遺物の課題として、より古い時代ものについては編年構築や年代観などの研究成果の蓄積があるが、近代に関する研究の蓄積はまだ少ない現状がある。文献史学などの成果との連携を強めていく必要がある。

また近代史は現代社会と密接に関係することも特徴で、先史時代からの歴史的な系譜を現在と繋ぐ重要な役割も担うものである。

引用・参考文献

天野賢一　2008「横浜市中区山下居留地遺跡-近代の外国商館跡と街路-」『第 32 回神奈川県遺跡調査・研究発表会』発表要旨　神奈川県考古学会

天野賢一　2009「山下居留地遺跡の調査」『有限責任中間法人日本考古学協会第 75 回総会』研究発表要旨 有限責任中間法人日本考古学協会

天野賢一　2009「山下居留地遺跡」『発掘された日本列島 2009』新発見考古速報　文化庁編　朝日新聞出版

神奈川県教育委員会　2009「横浜開港の考古学」神奈川の遺跡展 2009・巡回展　神奈川県教育委員会・愛川町教育委員会

天野賢一　2010「近代の遺跡」『掘り進められた神奈川の遺跡　旧石器時代から近代まで』財団法人かながわ考古学財団編　有隣堂

財団法人かながわ考古学財団　2010「山下居留地遺跡」かながわ考古学財団調査報告 258

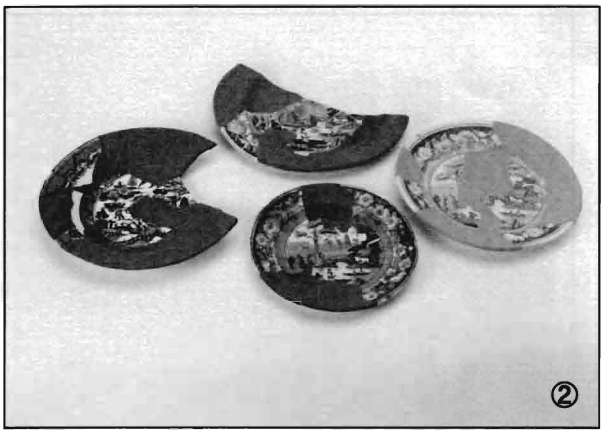
天野賢一　2011「近代・現代の動向-近代遺跡の調査研究事例から-」神奈川の考古学 最近の動向　平成 22 年度考古学講座　神奈川県考古学会

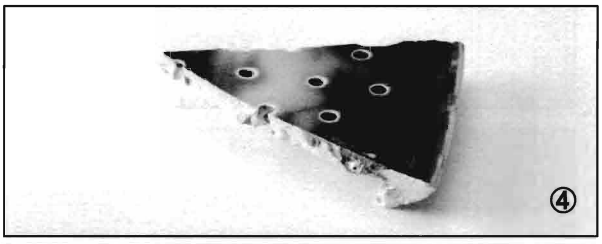
天野賢一　2011「山下居留地遺跡」『季刊考古学』第 115 号　特集低地の考古学　雄山閣

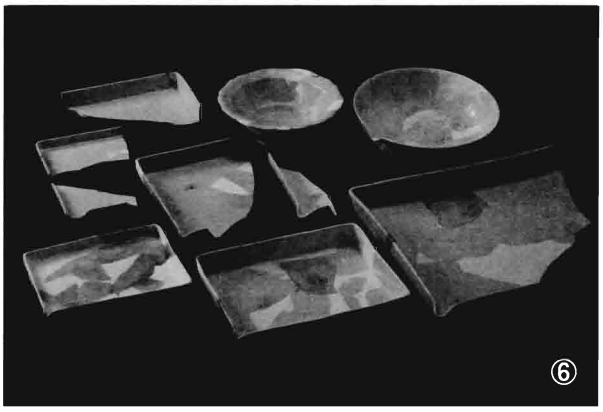
天野賢一　2011「近代遺跡出土資料の小考-神奈川の近代遺跡などから出土した国産タイルについて」『論叢考古神奈河』第 19 集　神奈川県考古学会

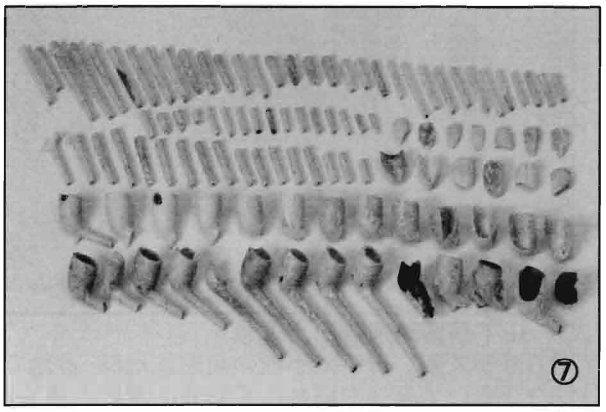
天野賢一　2011「近代遺跡出土資料の様相-山下居留地遺跡出土の煉瓦について-」『神奈川考古』第 47 号　神奈川考古同人会

天野賢一　2012「近代遺跡出土資料の様相 2-山下居留地遺跡出土のドイツタイルについて-」『神奈川考古第 48 号』神奈川考古同人会



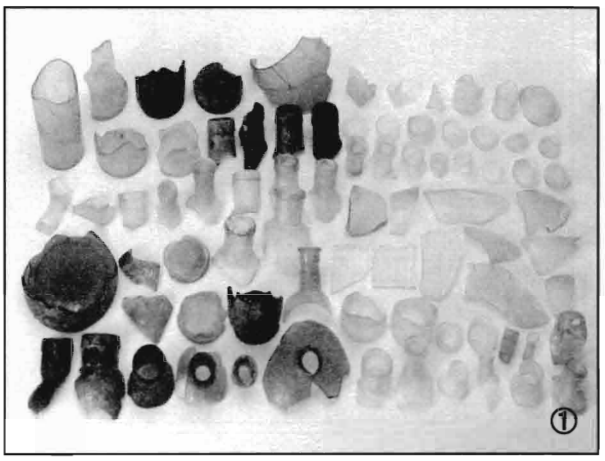


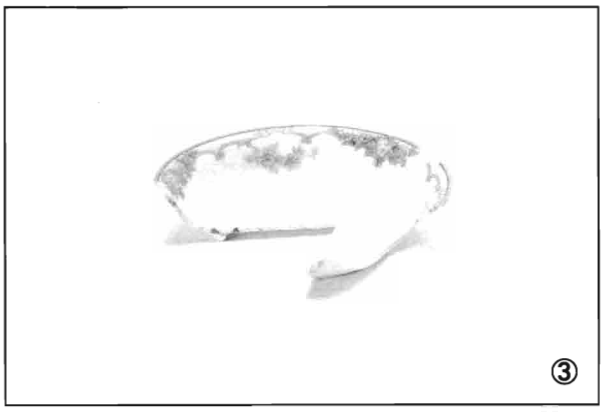


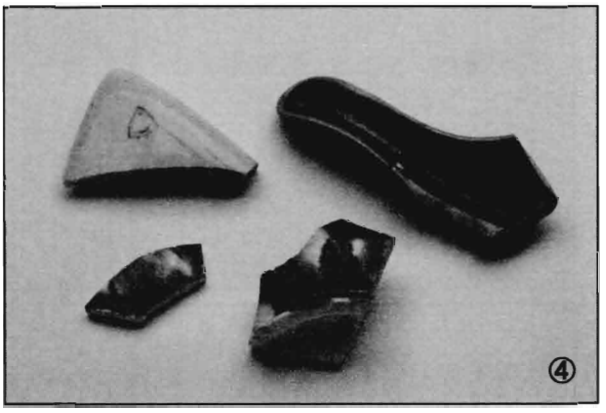


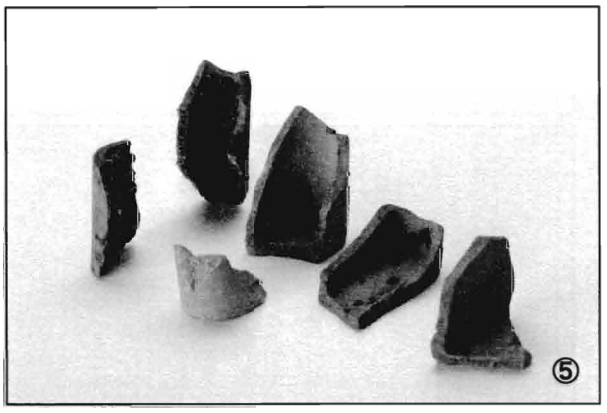
①山下居留地遺跡出土西洋遺物　②イギリス製皿　③～⑤保温皿など　⑥写真用品　⑦喫煙具

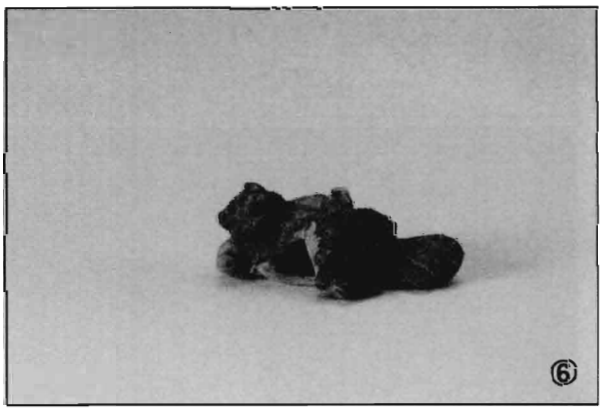
調査では多量の西洋遺物が出土し、製作地はイギリスやオランダなど欧州各国に及ぶ。ガラス瓶は豊富な内容で、ワインボトルやビール瓶、小型で緑色の炭酸水瓶などがある。砲弾形で緑色はラムネ瓶で、コルク栓や留め金が残る。四角い黒色の瓶はジンボトルで、肩部分にメダル形のエンブレムが付く。肩部まで茶色の釉薬がかかるものはジャムやマスタード瓶、肩が丸みを帯びる把手付の炭酸水瓶などがある。炭酸水瓶には「NASSAW 公国」の刻印が施されている。口先が尖るものはインク瓶で、当時の商館業務を彷彿させる。











山下居留地遺跡出土遺物

①ガラス瓶　透明で小形の角瓶には55 番地で商館を構えていたコッキング商会のトレードマークの「樽」が陽刻で施されており、遺物の持ち主が特定できる希少な事例である。

②缶　鉄製の容器で、蓋部には、「GOODLASS WALL&Co. LIVERPOOL GENUINE LEAD RED」と社名・地名・鉛・赤との刻印がある。

③ノリタケ製食器　裏印は「丸木」・「弥次郎兵衛」・「M」各種が認められ、各年代のものがある。

④珉平焼　淡路焼の色鮮やかな陶器である。製陶技術は淡陶社に引き継がれ、タイル生産を行う。

⑤ダニエル電池の部品　ダニエル電池 John Frederic Danierll が 1836 年に発明した電池。

⑥眞葛焼　眞葛焼の狸亭「狸水注」大正 2 年(1913)の可能性が考えられる。

平成 24 年度神奈川県考古学会講座「文明開化の考古学」

2013 年 3 月 2 日（土）
於：横浜市歴史博物館

新橋駅の考古学

福田敏一

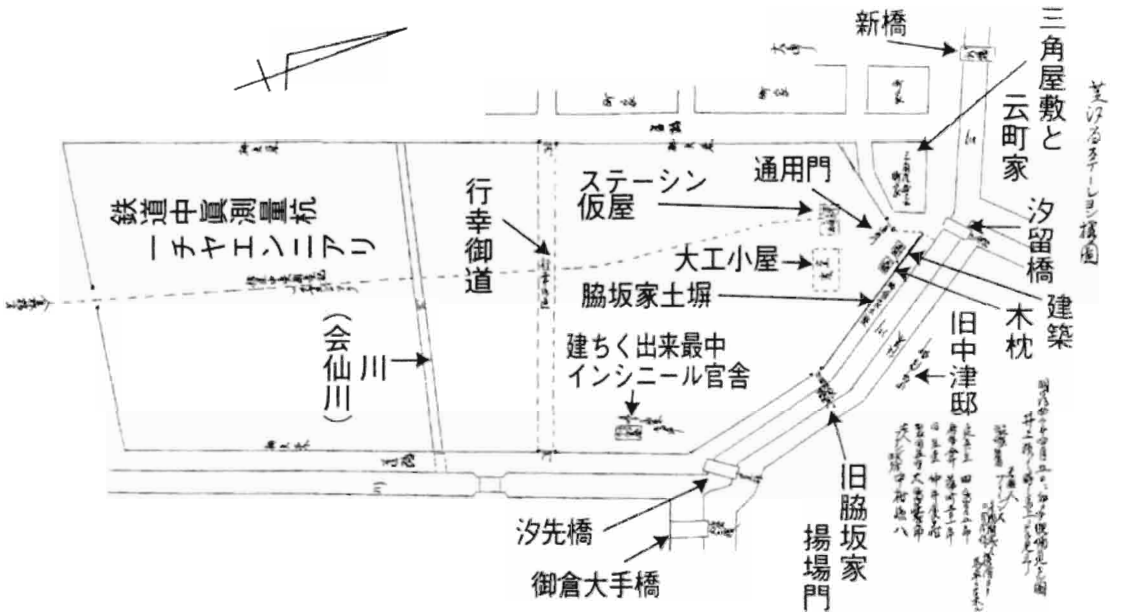


図１　明治４年の構内図

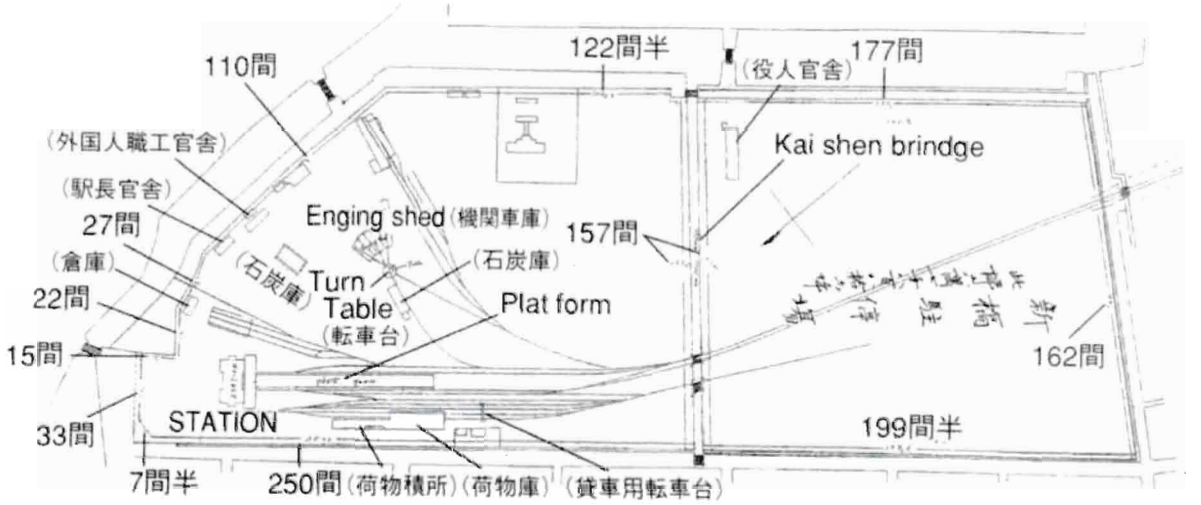


図２　明治７年の構内図

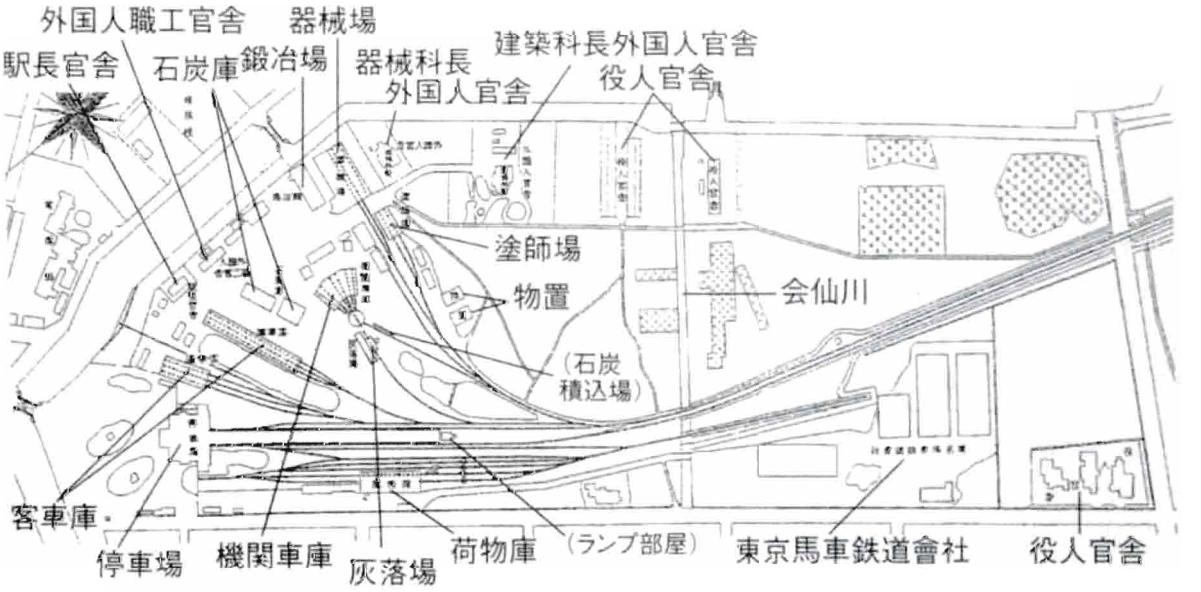


図３　明治１４年の構内図

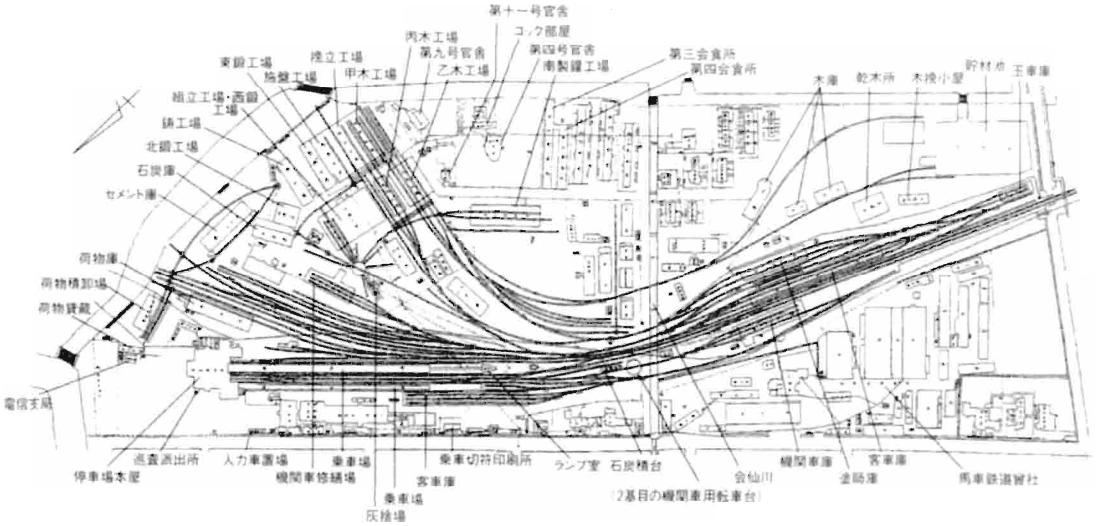


図４　明治３０年の構内図

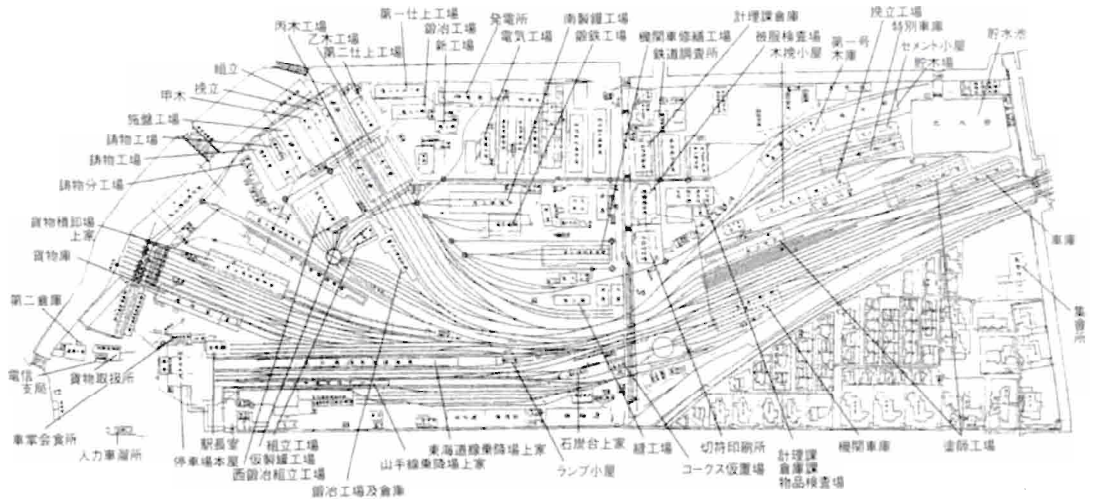


図５　明治４４年の構内図

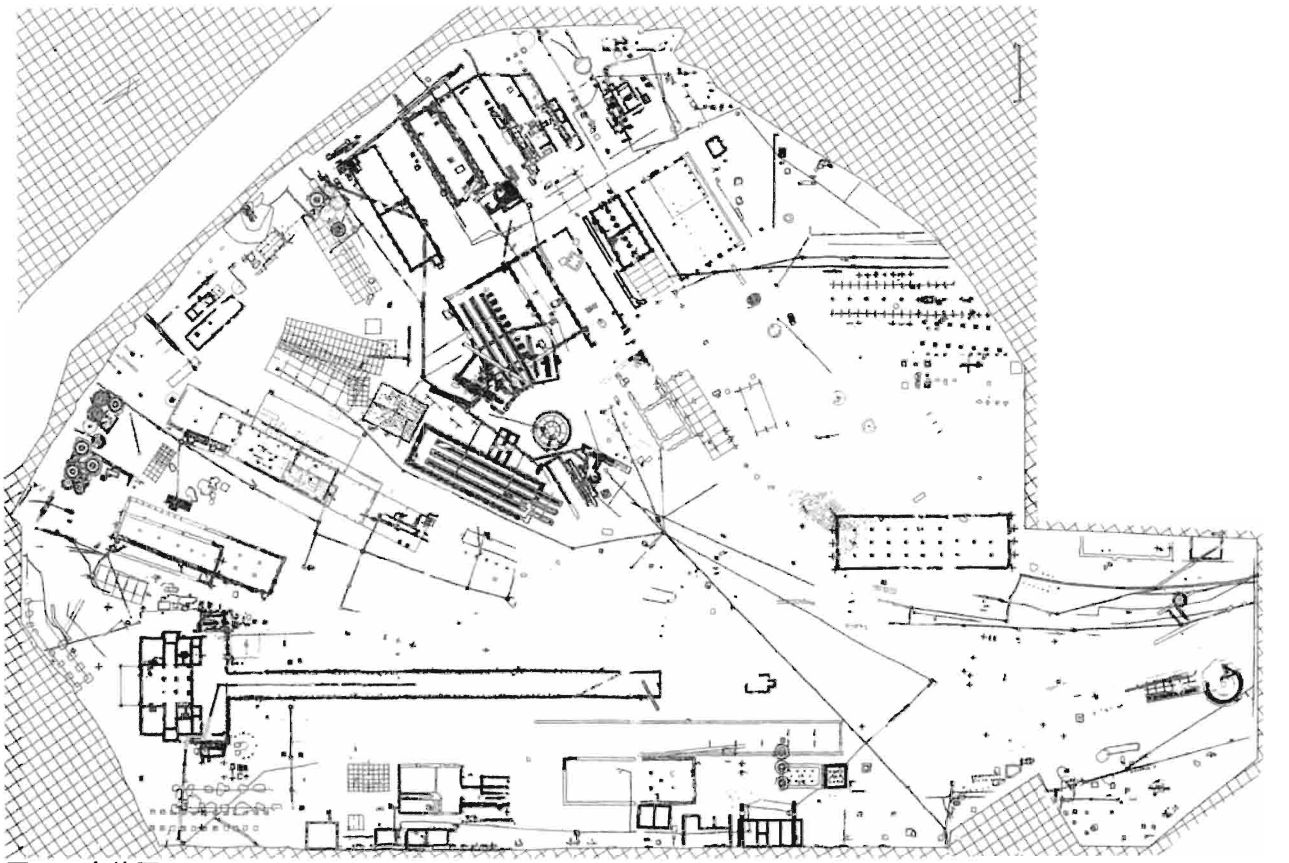


図６　全体図

A　別紙ハ新橋局使役人足之儀ニ付カーギル氏より相廻候右は畢竟其総括之指揮不行届下官之者斗え任セ置候ヨリ之弊害ニシテ兼々同類之苦情不少就中甚敷ニ至リ申出候義ト相見申候未ダ新橋長官モ其力充満ト申義ニも無之候得ハ現場御洞察ヲ以て不都合無之様一層御鞭撻被下度此段御倚頼ト為及上申候也

B　建築令官ヨリ左之通リ新橋鍛治場建築之義ニ付可報知申来リ候即チ圬工ハハ屋翼（ハフ）端並他之鎖細小工事ヲ出来候ノミ三架之義ハ只今組立ニ取掛候十四人の工夫の内吸烟の外ニ仕事致候者ハ僅カニ六名ノミ屢々説諭致候而も毫も聞入不申候十一月一ヵ月中相運候仕事ハ欧州の工夫壱人ニテ一週間ニ落成致程ノ事ニ御座候工事遅滞之義ハ全ク右之次第ヨリ怠慢ヲ生し候而随而冗費も多ク有之必竟工夫取締方不行届銘々勝手之所業ヨリ怠慢ヲ生し候事と相見候

C　其局使役人足の義ニ付別紙之通建築之長ホーイル氏ヨリ申出候趣ヲ以テカーケル氏ヨリ相回候処右ハ如何之次第ニ候哉不取締之義詳細取調至急可申出此相達候也

D　当課使役人足之義ニ付建築師長ホイル氏よりカーギル氏え申出同氏より申立候趣を以別紙相添取調之義過般音達委細承知致候右工業之義ハ素より細大ト無之都而外国人関係指揮致居殊更官員ニ於テも事業相捗取リ候様差図諸事注意致候故人足共ニ於テハ吸煙雑話等徒ニ時刻を費し候様之義ハ決而無之致候處往々外国人指揮違ひより工業再度模様替或ハ仕直し等ニ而畢竟期限遷延ニ及候を彼等失策を覆ハンカ為メ踪跡も無之義を飾言申立候様相見候過般御回し相成候別紙之旨趣一図了解難致依而夫々事実取糺し候処別紙之通申出候ニ付則相添此段上陳候也

E　新橋構内鍛治場建築工業之義追々期限遷延相成候處右ハ模様替其他仕直等ニ而二重之手数相懸リ候廉も有之候ニ付工程之大略左ニ申上候

一、七年七日十五日迄ニ地形并根石居付等全く落成之上同十八日ヨリ煉化石積立ニ取懸リ十月廿五日迄二軒下迄出来十一月廿日迄二合掌鉄物請石居付入口丸形共出来十二月九日迄二合掌取付方落成其後棟母屋鉄物取付方ニ取懸リ当今工業中ニ候事

二、九月三十日より十一月廿日迄煉化積職拾三人手伝人足十壱人石工弐人大工壱人位宛日々雇上ヶ窓台石二十六ヶ所居付窓枠取運同所丸形窓並裏表入口両妻共セリ持煉化石積立候處側通リ立煉化石共違ひ下拵之上居付ニ取懸リ候義ニ付自然手数も相懸リ殊ニ外国人ペータルソン附添差図致候得共間々差図違

ひより積替致候事も有之右様手戻等より工業捗取兼候義ニ有之候事

三、煉化石積立之間ハペータルソン懸リニ而工業見合候處柱形煉化石積立之節同人差図ニ而長弐尺斗ノ下ヶ糸定規を以段々組上サセ候處何分工業運び面職人も難渋致候ニ付官員差図ニ而縦横縁之定規を建テ段々ニ目盛リ是を目的ニ積立サセ候處工業運び方宜敷ペータルソンも格別存奇無之ニ付右仕方ニ而工業取斗候事

四、窓枠内外弐枚ニ拵エ煉化石積立後枠居込可致旨キントル氏差図ニ候得共後ニ而居込候事ハ工業難渋而已ならず同漆喰馴合兼自然保方も不宜ニ付キング え談し窓台取居付相添直ニ窓枠居付煉化石積立候處元来弐枚枠を壱本之材を以拵候得は手数も少ク持方も宜敷可有之ト存候事

五、東西両入口之外横側え新規入口を拵フニ付積立之煉化石ヲ取崩新規丸形枠居付候事

六、合掌鉄物其外屋根鉄物取付方等ニ差支フ候丸太而已取除ケ上家有蓋ニ差置不申而は職人之働不自由且雨天之節ハ工業難相成ニ付其意キントル、キンク、コックスえも度々相断候得共雨天之節ハ休業致候との事ニ而承引不仕故無余義任申分候處案之如く工業難渋ニ付又候内廻え低く上家を拵へ足場等懸渡候事

七、合掌鉄物上ヶ方ニ至り十一月廿日頃よりコックス懸リニ相成候處最前之仕様ハ蟹ボードを以合掌鉄物越請石え取付候筈ニ付セメントニテ受石取付置候處頭付ボードを以取付候段コックス指図ニ付請石起しボード穴を堀後にて前之通取付候處此工業官員中之見込ニ而は屋根下タ組之節地形水盛等致し請石居付合掌鉄物を乗せ棟母屋鉄物等仮ニ取付曲直見極メ之上請石ボード穴ヲ堀置候而受石居付候ハバ鉄付ボルトニ模様替成候共手数も懸リ不申且合掌棟母屋鉄物等取付方も工業手安く可有之ト存候事

八、十二月二日より合掌鉄物上ヶ方に取懸棟母屋鉄物等取付候處兼而右鉄物類不出来之ヶ所も有之様見請候ニ付曲直し之上取付候方可然旨外国人えも申談候得共更々取用不申弥取付候末出来形不宜故歟当今鍛冶職三人人足三人ニ而悉皆取付直し而已ニ十日余日も相懸リ申候

右之数ヶ条ハ模様替仕直シ等ニ而是カ為メ無益の手数を費し時日遷延ニ及候尤職人取締向ハ工業場所当科詰所間近之義故官員中時々見廻り監視仕候間定則休時間之外吹煙談話等ニ而時刻ヲ移シ候義一切為致不申候ニ付諸職人共之不精より斯く延ニ相成候訳ニハ無之候元来工業之義ハ丸ニ外国人引受差図仕官員中之見込通り相成兼候ニ付遅速も外国人之巧拙ニ依り候義ニ有之已往迚も見込相立兼候間現場之事情御汲取被成下度此段申上候也

八年一月　新橋　修繕科

（『鉄道寮事務簿』第二四巻）

浮世絵に見る文明開化と横浜

神奈川県立歴史博物館　桑山童奈

序　浮世絵とは何か？

○絵は絵空事？

絵空事　絵は画家の作意が加わって実物そのものではないということ。転じて、物事に虚偽・誇張の多いこと。

－『広辞苑』第四版、岩波書店、平成３年。

○先行図像の引用（盗用？）をすることが多い。脚色や省略ももちろんある。

→浮世絵に描いてあることを事実とみなすのは危険。

歌川広重（初代）
東海道五拾三次之内　藤沢　遊行寺

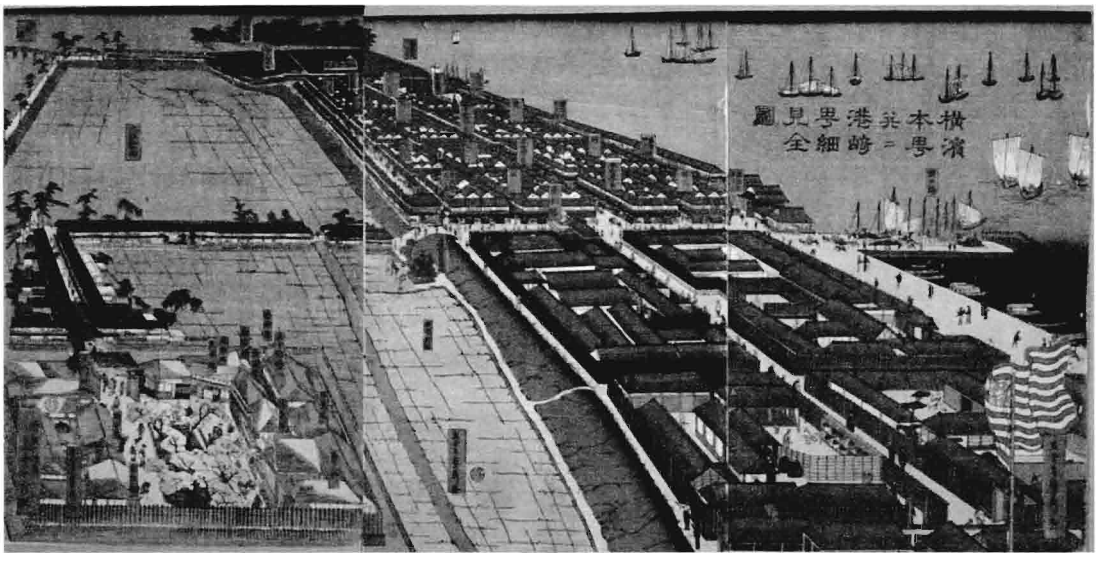
広重の絵を豊国（三代、画中の署名は「国貞」）が盗用して、自身が得意とする美人画の背景としている。よく見ると表現は若干異なる。
豊国の方が先輩格。

歌川豊国（三代）
東海道五十三次之内
藤沢図

1横浜開港から明治期の浮世絵

○横浜（浮世）絵　　安政６年（1859）６月の横浜開港以後の横浜を舞台に、外国人（安政の五カ国条約締結国の人々と中国人）の姿や彼らの生活や母国、新しく造られた町（日本人町と居留地、遊廓、石造建築物、鉄道など）を題材とした浮世絵。横浜を題材とするが、制作・出版は江戸。現在、800点強を横浜（浮世）絵とみなす。出版は万延元年（1860）２月頃からはじまり、翌文久元年にかけてピーク。その後、明治５年（1872）の鉄道開業関係の絵で一時、出版数が増えるが、衰退。「横浜浮世絵」とは、神奈川県立歴史博物館のコレクションを形成した丹波恒夫氏が提唱した言葉。

五雲亭貞秀
横浜本町並ニ港崎町細見全図
万延元年(1860)6月？



横浜浮世絵。画面の左下が港崎遊廓。左上に吉田橋。右下半分が居留地。上半分が日本神町、弁天社。遊廓だけがぽつねんと存在する。この時代、このような鳥瞰図をいかにして描いたか？

○開化絵　文明開化の産物や風俗ほかを描いた浮世絵。横浜（浮世）絵も含まれる。横浜の次は東京が舞台となり洋風建築、洋傘、電信線、鉄道、鉄橋ほか。

＊明治の浮世絵の特色
報道性が強まる-例、西南戦争、国会開設、天皇・皇后の行幸・行啓など
色は「赤」（以前は「明治の赤絵」と呼ばれ軽視されていた。）、次第に淡い色彩へ。
新旧対比の意図が見えるものも少なくない。
終焉-日露戦争（明治 38、39 年、1904～05）頃。

石斎治明
鉄道停車場
明治18年(1885)

明治の浮世絵らしい作例。天皇・皇后のお出かけの様子。背景に新橋ステンション。空は朝焼けでも夕焼けでもないが、一面真っ赤。

２浮世絵にみる鉄道

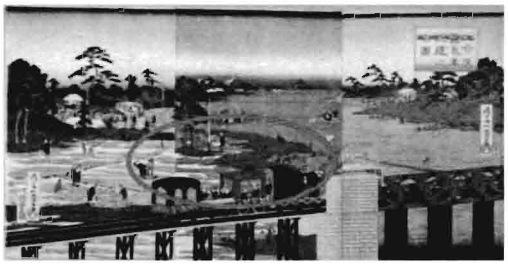
○鉄道の浮世絵

明治３年（1870）		鉄道を題材とした浮世絵の出版はじまる。
明治４年（1871）	８月	試運転はじまる。
明治４年 11 月		新橋駅駅舎竣工。
明治５年（1872）	５月	横浜-品川間仮開業。
	９月 12 日	開業式　新橋-横浜間開業。

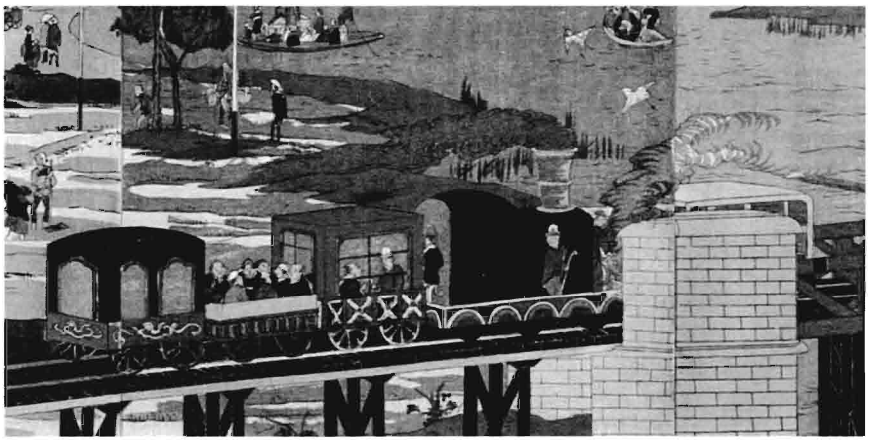
＊嘉永６年（1873）のペリー来航後にはペリーが献上した蒸気機関車の模型を描いた瓦版が出版された。横浜浮世絵にはアメリカやフランスの情報として蒸気車（らしきもの）が描かれたものもある。
＊開業以前の浮世絵には不思議な（あり得ない）機関車・客車の絵が見られる。

＊使用されたのはイギリスの車両であったが、アメリカの車両を描いた浮世絵もある（手本にした絵がアメリカのものと思われる。）

昇斎一景
六合陸蒸気車鉄道之全図　明治4年10月



機関車が先頭ではなく煙が二ヵ所から出ている。どちらへ進む？また左から2両目の客車は屋根がない。「想像図」とされるが、「想像」だけでこのような絵が描けるか？



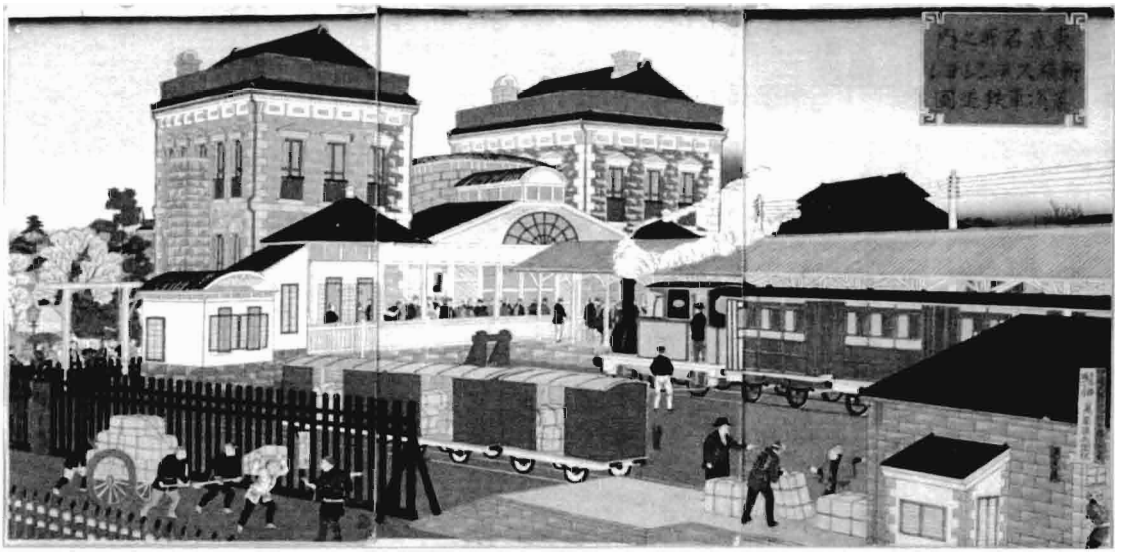
○鉄道錦絵出版数（鈴木重三監修『明治鉄道錦絵』交通協力会、昭和46年）から総点数271点の出版年の内訳（＊現在では同書掲載以外の浮世絵も確認されていると思われる。）

江戸時代出版	3点（＊瓦版は別。）
明治3年出版	6点
明治4年出版	17点
明治5年出版	43点
明治6年出版	25点
明治7年出版	19点
明治8年以降出版	86点
刊行年不明	72点

＊開業当時は新橋、横浜駅ほか沿線の様子と開業式。上野駅開設（明治16年）、天皇の行幸などが画題となる。横浜駅は開業以降あまり注目されないが、新橋駅は東京の玄関口として描かれ続ける。

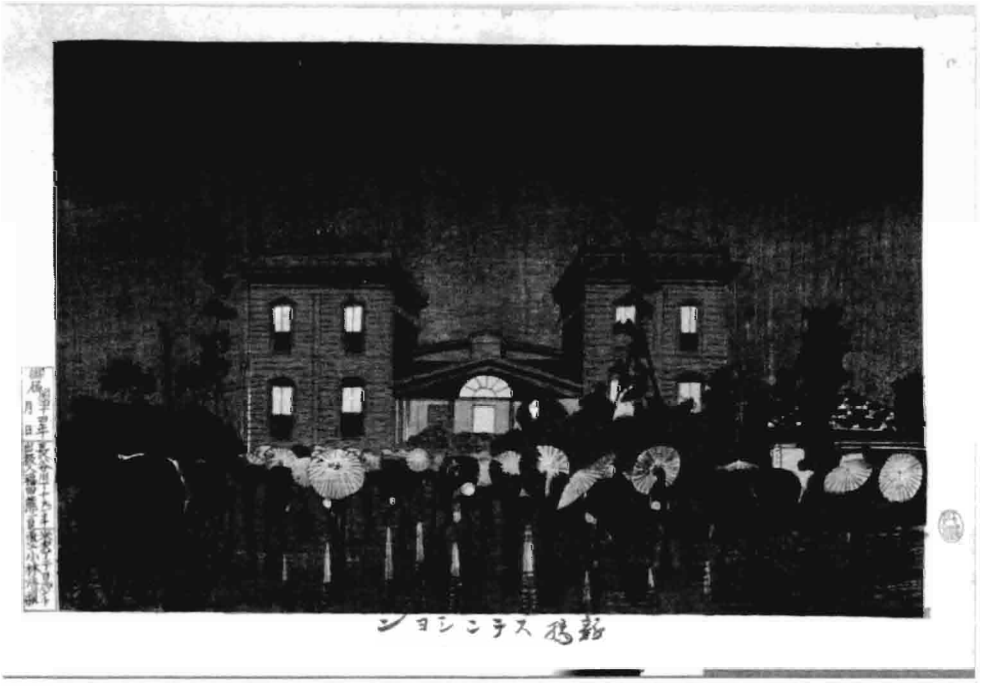
歌川広重(三代)
東京名所之内　新橋ステンション蒸汽車鉄道図

明治6年(1873)ころ？



残っている写真とよく似ている作例。広重(三代)が写真を眼にした可能性はあると思われる。幕末以前の浮世絵師にはあまりできなかった遠近法と陰影法が消化されていることも、現実的な空間に見える一因である。

小林清親　新橋ステンション　明治14年(1881)



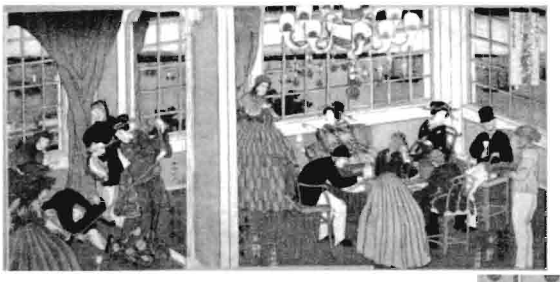
新橋ステンションを描いた中でも、もっとも叙情的な絵と思われる。光、特に地面の水に映る光の表現が清親の世界。写真には右手の植え込みはない。

３浮世絵にみる文明開化の横浜と東京

建造物・風俗（服装・持ち物）・調度類が目新しく、好奇心の的。

写真との比較ができる←小さいモノの表現は省略された？

五雲亭貞秀
横浜異人家飲食之図　文久元年(1861)１月



横浜浮世絵。外国人たちの宴席。調度類は西洋のものらしい。おそらく何かの参考図版を写したと思われる。参考図版を忠実に写したかどうかも不明。したがって、本図に描かれた食器などを出土品と結びつけることはできない。

【参考文献】

鈴木重三監修『明治鉄道錦絵』交通協力会、昭和 46 年。

小西四郎『錦絵　幕末明治の歴史』１～12、講談社、昭和 52～53 年。

神奈川県立博物館編『集大成　横浜浮世絵』有隣堂、昭和 54 年。

福田敏一『新橋駅発掘』雄山閣、平成６年。

鉄道博物館学芸部『鉄道開業物語』鉄道博物館、平成 24 年。

東海道藤沢宿（№78）第4地点・第6地点の調査

2013年3月2日　神奈川県考古学会
宮田眞（株式会社博通）

≪第4地点≫

所 在 地　藤沢市藤沢二丁目1870番1他地点
調査期間　平成19年10月15日～平成20年2月9日
調査面積　1007㎡

≪第6地点≫

所 在 地　藤沢市藤沢二丁目1878番他
調査期間　平成20年10月28日～平成21年1月28日
調査面積　969㎡

1. 遺跡の立地と歴史背景

本調査地（第4・第6地点）は神奈川県藤沢市二丁目に所在し、東海道藤沢宿（藤沢市№. 78）遺跡の範囲内に位置する。小田急藤沢本町駅の東方約350m、JR東海道線藤沢駅を起点にすると北北西約1.2kmの距離で、主要地方道藤沢・厚木線（旧東海道）が南に通る。また調査地は地勢的に見ると藤沢の中心部を形成する平野の中央北よりに位置しており、境川と引地川とに挟まれた地域に当たる。境川は調査地の東方約400m、引地川は西方約1.5kmの距離にある。また調査地の北約180mには境川の支流白幡川が流れる。調査地の北側一帯はかつてこの白幡川の氾濫原だったようだ。白幡川北岸近くには白幡神社がある。

藤沢宿と藤沢御殿

藤沢御殿は、徳川家康の手によって慶長頃に建設された。慶長五（1600）年に家康は藤沢に止宿し鎌倉に赴いていることから、これ以前既に御殿はあったと考えられる。また慶長元（1596）年に同じく家康によって中原往還の宿の一つとして、中原（現平塚市）に御殿が建てられていることから、藤沢御殿もこれに近い時期に建設されたと推考されよう。藤沢御殿跡地は調査地の東方約350m、境川の手前の西岸地域で現在藤沢公民館・藤沢市福祉会館の辺りである。

徳川家康は関ケ原の戦い以後間もなく幕府の諸制度の整備を実施しており、その中で、戦国大名の伝馬制度を基礎にした交通網の整備も重要な事項の一つであった。慶長六（1601）年まず五街道の一つ東海道に宿を定め、藤沢宿を始めとする各宿には三十六疋の馬の常置が義務付けられた。その後、参勤交代制成立に伴って伝馬50匹増の100匹の常置が義務付けられ、人足は50人と定められた。さらに享保十（1752）年には人足負担が50人増員され合計100人になっている。

藤沢宿と罹災

藤沢宿は江戸後期から明治にかけて（寛政9年～明治19年）12回の大火に見舞われている。今回の調査においても火災によると考えられる焦土面が2時期以上、旧東海道に近い調査区の南部付近で検出された。上記の大火の内、本調査地付近を類焼したものでは、慶応4年3月13日台町大火と明治13年11月27日の火災（大川屋火事）が挙げられる。

調査地付近の近世・近代の様相

さて第4地点付近の近世・近代の様相については、文久3年（1863）の町割り図が残る。それによる

と当該地は、「田むらや安兵衛」となっている。田むらや安兵衛は戦前頃まで呉服を商っていたとのことで、俗に「田安（たやす）」と呼称されていたようである。

2. 調査概要

第4地点

本調査地は南北に長く、現地表レベルは南端部（旧東海道側）が海抜10.5m前後、北端部が海抜9.7～9.9mで調査区中央部を境に北側が一段低くなる。遺構面は大きく分けて2面（南側は4時期）が確認され、江戸中期（宝永以降）～後期、近代（明治～大正・戦前）の遺構群が検出された。検出遺構は、建物21棟、石組遺構6ヶ所、石敷（石畳）2ヶ所、井戸址8基、溝址1条、土坑84基、方形土坑4基、埋甕4基、モルタルによる枡（水槽か？）1他である。

出土遺物は桟瓦（鉛瓦）、近世・近代の陶磁器類、かわらけ、瓦管（土管）、金属製品、漆器、木製品（荷札等木簡類を含む）、セルロイド製品等合計で遺物収納箱に110箱を数える。

今回の検出遺構で特に注目されるのは、石蔵建築の基礎遺構で蝋燭地業と言われるものである。これは建物（蔵）の四周に沿う形でトレンチ状の穴を掘り廻し、その中に角柱状の鎌倉石切り石（蝋燭石）を等間隔に並べ、さらにその周囲を土丹・凝灰岩・栗石等で埋め堅固につき固めたもので、現代のビル建築の基礎のような物である。蝋燭地業の下層にはさらに松材の横木（筏）や松杭による、沈降防止の施工がなされていた。今回は、この様式あるいはその発展系と考えられる建物が合計で8棟見つかっており、これらは一つの敷地と見なされるエリア内の西側に南北に並ぶ形で配されていた。蔵の東側には母屋建築と考えられる建物の基礎遺構も見つかっている。

井戸は主に枠材にモルタルを用いているが、井戸枠周囲を掘り下げたところ内1基にはモルタル枠の外側に木製の樽枠が残っており、元来は樽枠の井戸であったことが判明した。

調査区を南北に大きく区画する溝1が、調査区のちょうど中央部を東西に貫通する。溝1の覆土最上層からはプラスチック製の工事標識の破片が出土しており、溝1が比較的最近まで地表に露出していたことが確認できる。しかしこの溝は明治期の地勢図中に描かれており、その起源は近世に遡る可能性も否定できない。この図によるとこの溝の東側延長部は、妙善寺の西縁を通って白幡川方面へ北上することがわかる。

第6地点

調査の結果3時期の遺構面が検出された。

第1面

第1面は海抜8.8m前後で検出された。第1面からは母屋建物数棟、掘立柱建物（付属舎）1棟、柱穴列1列、石列5列、基礎遺構、石樋2筋、井戸2基、土坑22基、が検出された。

母屋建物に関しては礎石下の地固めの並びが見つかったもので、土丹・鎌倉石・栗石等を使った地固めである。掘立柱建物はおよそ3.5m四方と小型で、柱間も65cm間隔と小さいことから、物置小屋のような建物が想定される。井戸1は鎌倉石切り石を平面円形に組んだもの、井戸2はモルタルの円形の枠で、何れも近年まで地表に露出していたものと考えられる。石樋は鎌倉石製で雨落ち等排水の施設であろう。検出土坑は明らかに第2次世界大戦以前の物を対象とした。第1面の遺構群の年代は関東大震災以降と考えられる。

第2面

第2面は現地表下1～1.2m（海抜8.7m）前後で検出された。第2面は調査区南部のみに遺存しており、遺構は石列1列、井戸1基を含むが遺構の中心は土坑群で合計10基が検出された。土坑は多くが平

面方形をしており中には一辺が5m以上の大型な物が複数数えられる。これら大型の土坑からは樽の部材等を始めとした大量の遺物が出土しており、その量の多さから何軒かの共同の芥穴（廃棄施設）であったことが推察される。これら芥穴からは生活廃棄物の他に、荷札を始めとした近世（近代も含まれるか）木簡が多量に出土している。

第3面（最終面）

第3面は現地表下130～180cm（海抜8m）前後で検出された。遺構は通路遺構7条、溝1条、橋1箇所、井戸3基、土坑1基、竹組み遺構1、方形木組み遺構3基を検出した。

通路遺構は幅員約2～4mを測り、調査区内を東西南北方向縦横に走っており、調査区中央を東西に貫通する水路1を橋によって渡っていた。通路の構造は角材と杭で両側の土留めを施し、その中間に大量の木材を芯に入れたもので、建築材等の廃材を中心にして、樽の部材や樹木の枝あるいは家財の破片等に至る身の回りにある全てのものを利用している。これはこの地域が砂丘背後の湿地帯で地盤が悪かったため、平易に通行するために木材を活用した一種の舗装道路と言うことができよう。この通路遺構は第3面で確認されたが検出部分は通路の基部で、道自体は第2面期に使用されたものである。

水路遺構は幅がおよそ2.5m、深さが1.5m前後を測り、基本的に杭を打ち込んで護岸を形成している。上述したように調査区を東西に貫通しており、橋が1箇所南北に架かる。また北岸の一角に方形をした張り出しが設けられており、船着場だった可能性も考えられる。調査地の北側は現在開発が進みショッピングモールとなっているが、その敷地内にはかつて境川の支流白幡川に続く水路が流れていたとの事で、境川からの舟運が着岸した港とも考えられる。南側の街道沿いの表店で商う物資のための運河的性格を想定することができそうである。

井戸址は3・6が樽による枠、5は枠材の遺存は無かった。

3. まとめ

第4地点

以上調査の成果を概観したが、遺跡の詳細については報告書に委ねたい。調査の成果から一瞥して述べるなら、藤沢宿の起源は慶長期頃（1600年前後）まで遡ることができるが、本調査地付近では本格的な町屋の成立は18世紀以後と考えられる。その根拠は今回の最終面（地山面）からは、宝永四年（1707）の富士山大噴火の際に降り積もった所謂「宝永火山灰」を廃棄した土坑（ごみ穴）が複数検出されたが、建物址や生活芥を包蔵する土坑等の検出が一切無かったことである。

その他に本調査地点からは上記した「田安」の紙製商品ラベルや判子、店章を意匠した軒瓦、店章入りのオリジナル湯飲み茶碗、和舟のミニチュア製品、荷札木簡等が多く出土しており、まさしく田安の旧跡であることを物語っている。

第6地点

今回江戸後期から明治期にかけての第2面・第3面においては住宅や店などの建築遺構の検出は皆無であった。それに対して水路、通路、大型の芥廃棄土坑等が調査区全域に亘って見つかっている。検出状況から今回の調査区の範囲内においては、地域で共用した公的な性格の強い場と考えたほうが妥当なようである。しかしそういった芥穴の中には、廃棄された荷札木簡等の出土遺物から、土坑42・44・井戸5は伏見屋、土坑41・43・60・竹組遺構は煙草屋といったような、各人（家）専用と考えられるものが確認できた。

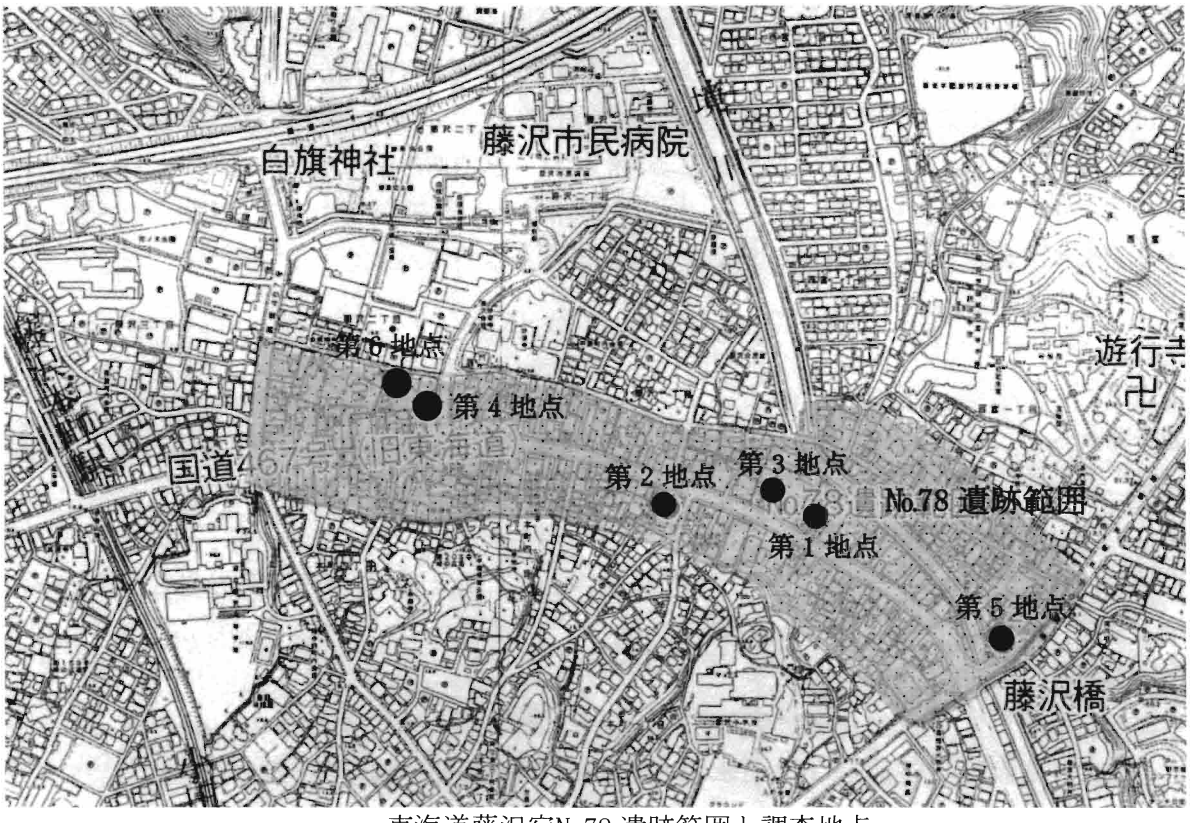
さらに出土木簡から、藤沢宿が地域経済において大きな位置を占めていた事の一端が明らかになった。

その一つは、藤沢周辺の生産者から藤沢宿の煙草屋茂兵衛宛に水油を送りつけた際の荷札で今回複数

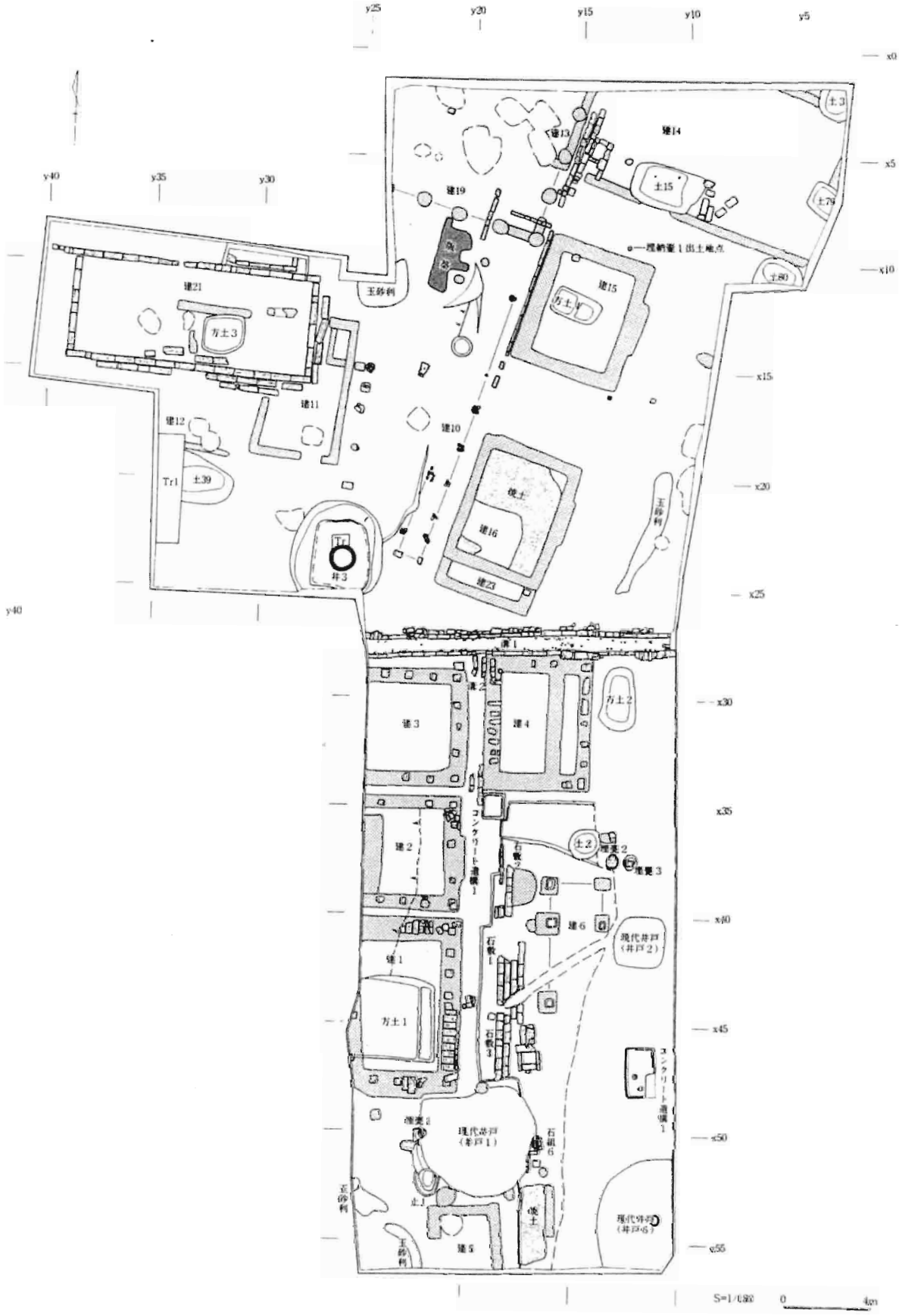
出土している。水油はゴマや菜種から抽出された植物性の油で灯火に使われた。この記載内容に横浜開港資料館の西川武臣氏が大きな発見をされた。それは氏が過去に調査された横浜市金沢区の旧家「松本家」に伝わる江戸後期の古文書の中に、藤沢宿の煙草屋茂兵衛が同家へ水油を発送した旨の内容が記載された送付状が含まれていたことである。荷札木簡の受取人の煙草屋茂兵衛と、松本家に水油を販売し送りつけた煙草屋茂兵衛は間違いなく同一人物であろう。遺跡から発見された考古資料と、遠隔地に残されていた古文書の内容が符号したことは、極めて稀有なことで奇跡としか言いようがないだろう。また藤沢宿の商人の商業活動が想像を超えて広域で精力的あったことが証明された。

さらに出土木簡の中に興味深い資料がある、それは鶴見大学の松吉大樹氏が指摘された第3面通路遺構出土の墨書木札で、一方の面に「證文当板」の墨書が大きく書かれ、その下方に「扇谷会所」の四角い焼印が押されており、もう一方の面には上4行、下3行の墨書が上下二段に記されている。この木札に焼印されている扇谷会所とは鎌倉市扇が谷に現在も所在する浄土宗寺院(東光山英勝寺)のことである。英勝寺は寛永一三年徳川家康の菩提を弔うために英勝院が開創した人である。英勝院は徳川家康の側室（お勝の方）になった女性で、水戸徳川家の始祖徳川頼房の准母である。従って英勝寺の住持には江戸時代を通して水戸徳川家に関係する女性が入っており、水戸徳川家から手厚い庇護を受けている。しかし英勝寺はその来歴の高さゆえに一般の檀家を持たなかったためもあってか、経済状態は決して安泰ではなかったようだ。そのため徳川家光から祠堂修繕のために贈与された三千両を元金として、文化十一年(1814)祠堂金貸付所を設けることになった。これを(水戸様御貸付所)あるいは「扇谷会所」などと称した。藤沢宿を始め藤沢市域ではこの貸付金がかなり浸透していたようで、藤沢市羽鳥の三觜家は幕末期に、英勝寺や地元の遊行寺の祠堂金貸付業務を請け負っている。その他にも藤沢宿周辺の有力な町民・農民達から、祠堂金の名義をもって預金を仰ぎ貸付金の増資を図っており、その預金に対する預かり證文が残っている。

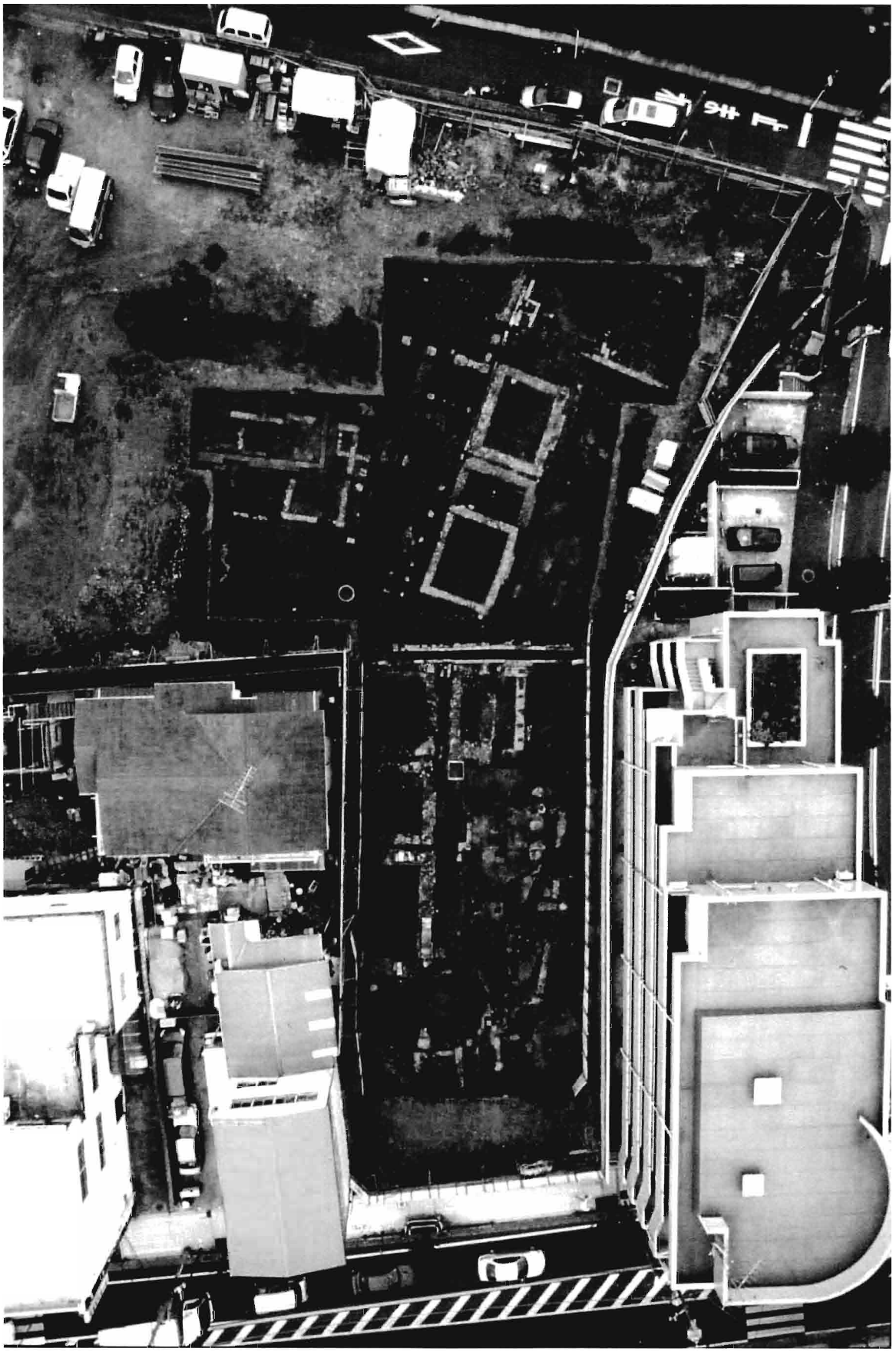
このように藤沢宿が思わぬ方面への交易や、広域な金融活動に深くかかわっていたことが調査成果の中から理解できた。今後さらなる成果に期待する。



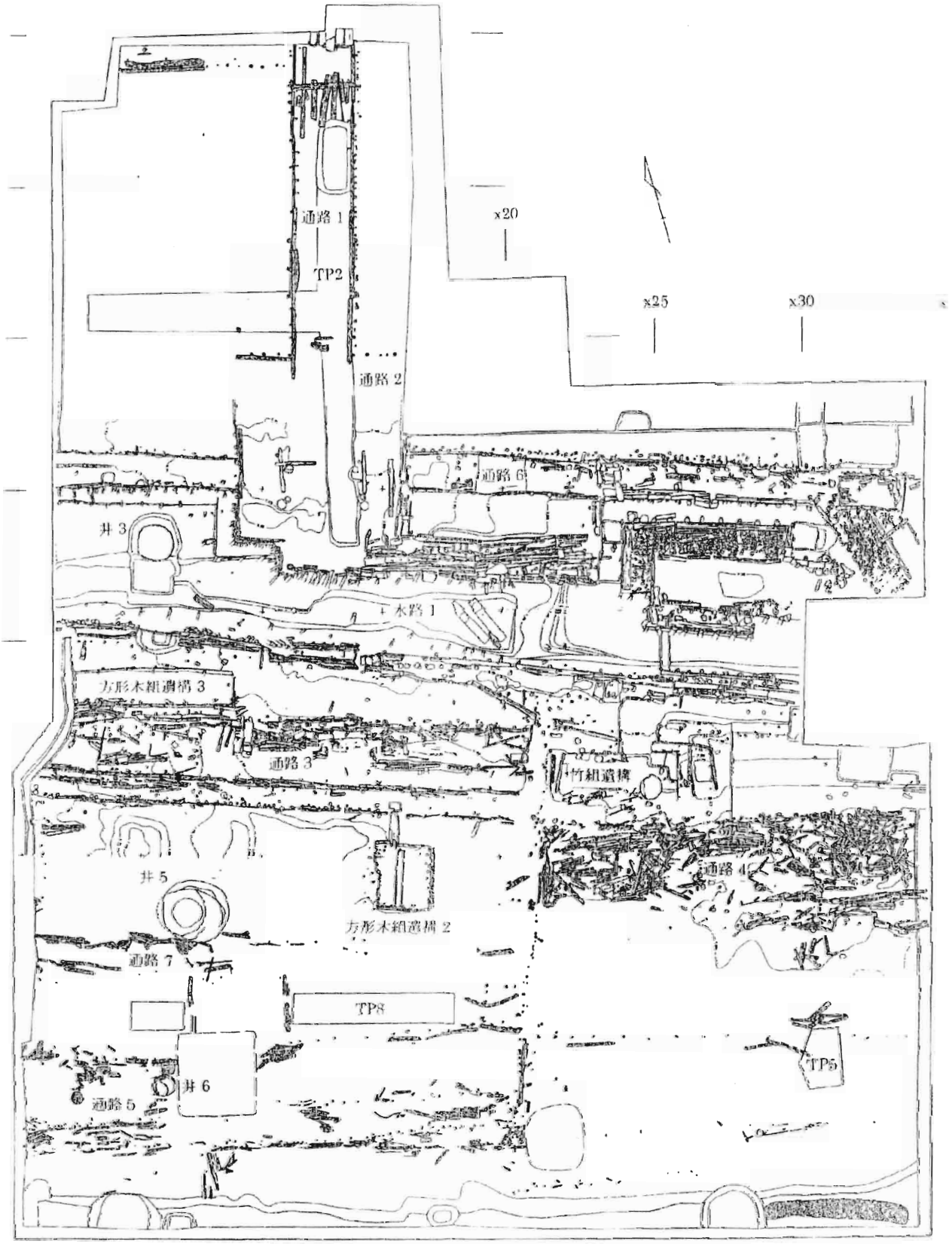
東海道藤沢宿No.78 遺跡範囲と調査地点



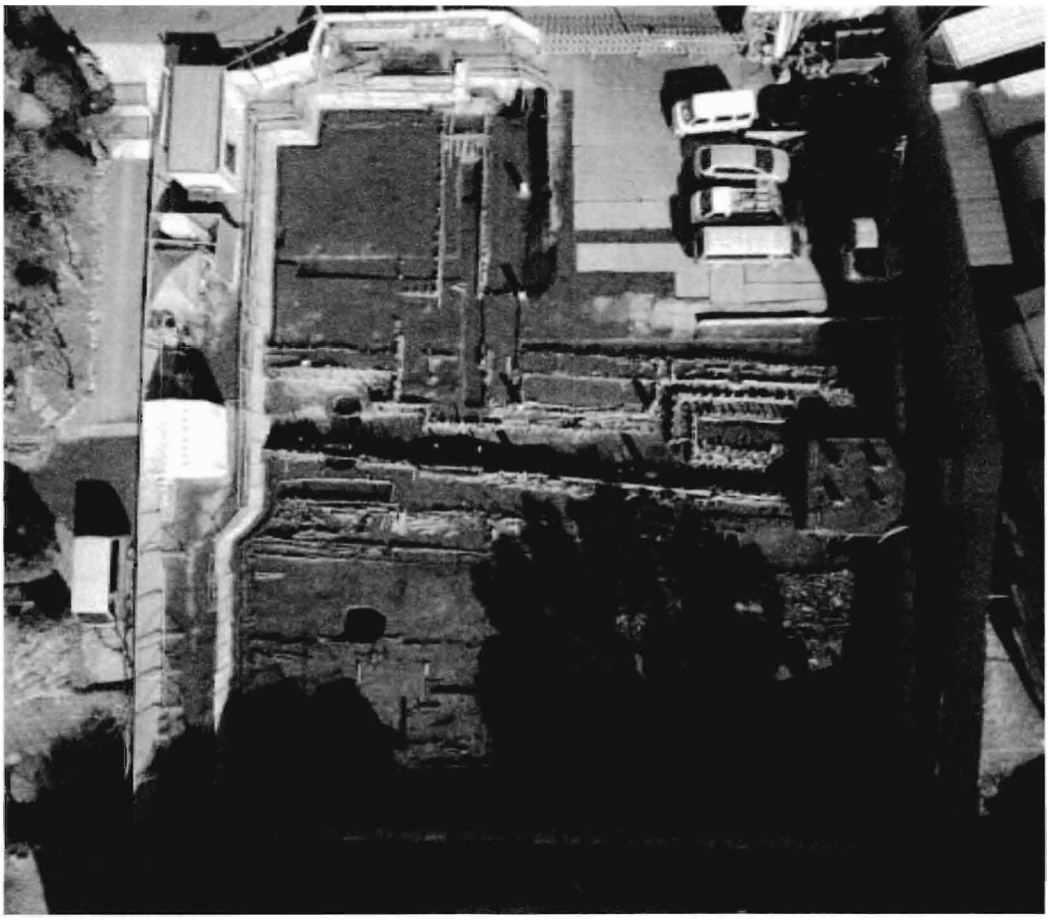
第４地点　第１面遺構配置図



第４地点　第１面全景（上が北）



第 6 地点　最終面遺構配置図



第６地点　最終面全景（上が北）

▲水路１（北西から）

通路３（西から）▶

横浜生まれのフランス瓦

2013/03/02　青木祐介

1　はじめに

◎文明開化と西洋瓦

横浜もののはじめ・・・日本最初のフランス瓦（ジェラール瓦）

文明開化期における西洋技術の受容と伝播

近代的な製造技術の導入／在来の瓦製造業への影響／民間実業家ジェラール

2　実業家ジェラールとフランス瓦

◎フランス瓦とは

ヨーロッパ中部に分布するフラット・タイル（Flat Tile）

上下左右の瓦をつなぐ接続部／桟に引っかける裏面の突起／千鳥葺き

◎フランス人実業家ジェラール（Alfred Gérard, 1837-1915）

1863（文久 3）年来日、1878（明治 11）年離日

飛鳥田一雄『素人談義 三人ジェラール』（有隣堂、1974 年）

肉屋ジェラール／水屋ジェラール／瓦屋ジェラール

山手の瓦工場（現在の元町公園）は 1905（明治 38）年頃まで存続

ジェラールを取りまくフランス人ネットワーク　→ 別表

レイノー（J. Reynaud）／ドゥヴェーズ（A. Devése）／マロン（H.J.Maron）

晩年は故郷のランス（Reims）で金利生活者として暮らす

◎ジェラール瓦の３型式

Ⅰ型（ⅠＡ～ⅠＥ）・Ⅱ型・Ⅲ型（岡本東三の分類による）

いずれも裏面に製造年・工場名を刻む

型式＼年号	1873	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
Ⅰ型	A B	C	D	E														
Ⅱ型				○	○	○							○	○	○		○	
Ⅲ型															○		○	

工場刷新？

表：岡本東三「開港横浜で生まれた仏蘭西瓦」より

ジェラール帰国

ドゥヴェーズ経営開始

『日本絵入商人録』発行

＊出土遺物・古写真から確認される最も古い事例

1874（明治 7）年　佐倉連隊兵営（現・国立歴史民俗博物館所在地）：ＩＤ型

1877（明治 10）年　工部大学校講堂：ＩＥ型

◎ジェラール瓦工場の近代的システム

銅版画『日本絵入商人録』(1886年)に描かれた工場内部

蒸気機関による機械製造(Steam Tile)

土練機／下地成形機／瓦プレス機／土管成形機　→ 溝入り土管(煙道管)の発見へ

ヨーロッパの素焼き瓦とは異なる燻した黒瓦・・・製造工程における和洋折衷?

3　模倣ジェラール瓦の登場

◎日本人職人によるジェラール瓦の模倣

1877(明治10)年　第1回内国勧業博覧会に「仏瓦」「仏国形屋瓦」が出品

田村三五郎(深川猿江町)／植松金蔵(浅草瓦町)／赤穂太五郎(本所菊川町)

ジェラール瓦I型に相当

1880(明治13)年9月4日　ジェラール工場による「偽物注意」の広告

◎木製押型の発見

埼玉県深谷市の元瓦製造業者宅からフランス瓦の木製押型が発見(2007年)

明治時代の植竹仙三郎によるもの

上下2枚で1組／付属の二股型道具など

4　おわりに

◎継承されなかったジェラール工場の技術

1917(大正6)年　愛知県高浜市で日本洋瓦株式会社設立

マルセイユから技術者を招いて機械製造のフランス瓦を製造開始

以降、国内でのフランス瓦普及を担う

◆おもな参考文献

青木祐介「アルフレッド・ジェラールと瓦工場」『横浜都市発展記念館紀要』第5号(2009年)

青木祐介「模倣ジェラール瓦のつくり手たち」『ハマ発 Newsletter』第15号(2010年)

青木祐介・坂上克弘「横浜の近代遺跡と出土遺物 その4」『横浜都市発展記念館紀要』第8号(2012年)

岡本東三「開港横浜で生まれた仏蘭西瓦」『横浜市歴史博物館紀要』第6号(2002年)

岸上興一郎・田丸博美「土蔵と西洋瓦－徳江義治家史料をとおして－」『郷土よこはま』第79号(1977年)

坂上克弘・青木祐介「横浜の近代遺跡と出土遺物 その1 －煉瓦・ジェラール瓦・土管を中心に－」『横浜都市発展記念館紀要』第3号(2007年)

坂上克弘・青木祐介「模倣ジェラール瓦の木製押型」『横浜都市発展記念館紀要』第5号(2009年)

澤護「アルフレッド・ジェラール－横浜に於ける水屋・瓦屋の魁－」『千葉敬愛経済大学研究論集』第32・33合併号(1988年)

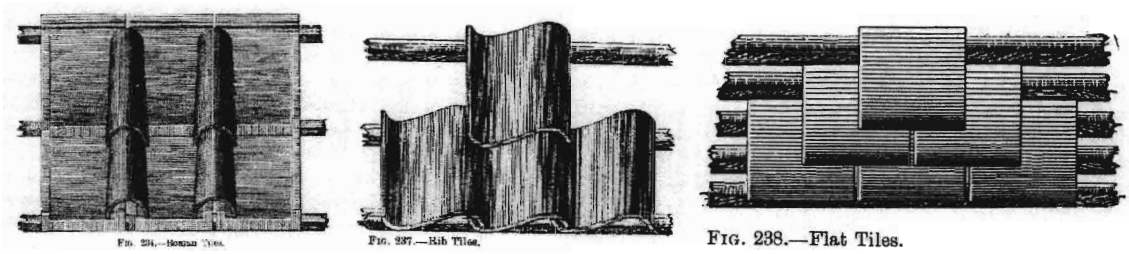
中武香奈美「ジェラール(1837～1915)故郷、ランス市に錦を飾る」『開港のひろば』第50号(1995年)

西堀昭「幕末・明治期の横浜のフランス人企業家アルフレッド・ジェラールについて」『横浜経営研究』第21巻第1・2号(2000年)

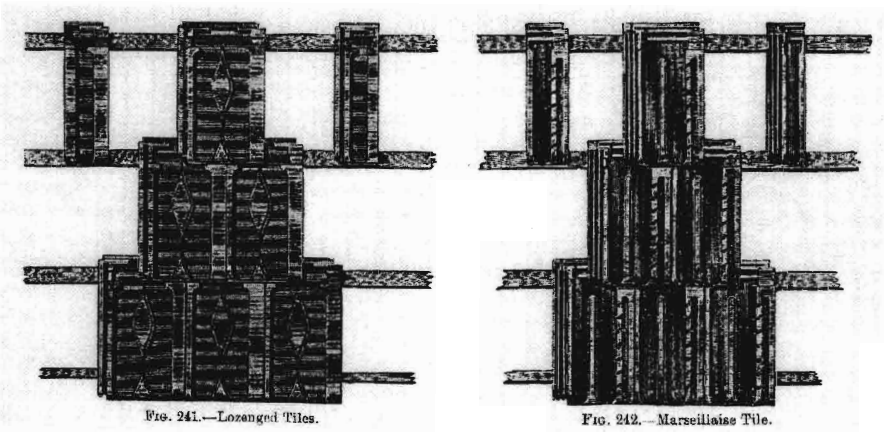
ディレクトリーにみるジェラールとその周辺の人物の動向

	ジェラール／Alfred Gerard		ドゥヴェーズ／Adrien Devese		マロン／Henri J. Maron		レイノー／John Reynaud		ガロー／R. Garaud	
版	地番	表記	地番	表記	地番	表記	地番	表記	地番	表記
1864	横浜	French resident	上海	Fajard Schauwecker and Co.	上海	Fajard Schauwecker and Co.				
1865	横浜	Army and Navy Contractor	横浜	Remi, Schmidt and Co.	横浜	Fajard Schauwecker and Co.				
1866	横浜	Army and Navy Contractors*1	横浜	Remi, Schmidt and Co.	横浜	Fajard Schauwecker and Co.				
1867	横浜	army and navy contractor	横浜	Remi, Schmidt and Co.	横浜	Fajard Schauwecker and Co.				
1868	169	contractor	10 a	E. Schmidt & Co. (manager)	—	—	—	—		
1869	169	contractor	10 a	E. Schmidt & Co. (manager)	173	—	90 a	Ravel, Blanc & Co.		
1870	169	Gerard & Co. "Yokohama Butchery"	10	Edouard Schmidt	89	Maron & Co.	89	Maron & Co.		
1871	169	contractor	—	—	—	—	90 a	Ravel, Blanc & Co.		
1872	169	Navy Water Works Office	28	V. Aymonin & Co.	89A	Maron & Co.	89A	Maron & Co.		
1873	169	Navy water-works office	28	V. Aymonin & Co.	89 b	Maron & Co.	89 b	Maron & Co.		
1874	169	navy water works office	28	V. Aymonin & Co.	(未表記)	Maron & Co.	(未表記)	Maron & Co.		
1875	188	Navy Water Works, Steam Tile Manufactory	64	V. Aymonin & Co.	153	(absent)	153	Maron & Co.		
1876	189	(absent)	64	V. Aymonin & Co.	153	(absent)	153	Maron & Co.		
1877	188, Bluff77-78	Navy Water Works, Steam Tile Manufactory	64	V. Aymonin & Co.	—	—	20	Grand Hotel (manager)		
1878	188, Bluff77-78	Navy Water Works, Steam Tile Manufactory	64	V. Aymonin & Co.	10	(absent)	20	Grand Hotel (manager)		
1879	Bluff 77	Steam Tile Manufactory*2	156	V. Aymonin & Co.	10	(absent)	74	French Consulate (Interprete Pour La Langue Anglaise)	—	—
							86	General Commission Agent		
1880	Bluff 77	(absent)	156	V. Aymonin & Co.	—	—	74	French Consulate (Interprete Pour La Langue Anglaise)	188	R. Garaud
							157	J. Reynaud		
1881	Bluff 77	(absent)	156	V. Aymonin & Co.			157	Agent for A. Gerard	188	private residence
1882	—	—		—			157	Agent for A. Gerard	188	private residence
1883	—	—	—	—			157	J. Reynaud	188	private residence
1884	—	—	Bluff77	—			157	Merchant	188	private residence
1885	—	—	—	—			—	—	188	private residence
1886	—	—	—	—			157	(absent)	188	private residence
1887	188	Navy Water Works	Bluff77	Gerard's Steam Tile Manufactory			157	—	—	—
1888	—	—	Bluff77	Gerard's Steam Tile Manufactory			157	—	188	Navy Water Works
1889	—	—	Bluff77	Gerard's Steam Tile Manufactory			157	(absent)	188-B	Navy Water Works
1890	188-B	Navy Water Works*3	Bluff77	Gerard's Steam Tile Manufactory			157	(absent)	—	—
1891	—	—	Bluff77	Gerard's Steam Tile Manufactory			157	—	188-B	R. Garaud
1892			Bluff77	Gerard's Steam Tile Manufactory			157	—	188-B	R. Garaud
1893			Bluff77	Gerard's Steam Tile Manufactory			157	—	188-B	R. Garaud
1894			Bluff77	Gerard's Steam Tile Manufactory			157	(absent)	188-B	R. Garaud
1895			Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157	(absent)	188-B	Residence
1896			Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157	(absent)	-	-
1897			Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157	(absent)	-	-
1898			Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157	(absent)		
1899			Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157	(absent)		
1900		*1 Gerard and van de Polder	Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157-A	(absent)		
1901		*2 索引頁には名前なし	Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157-A	(absent)		
1902		*3 索引頁ではabsent	Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157-A	(absent)		
1903			Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157-A	(absent)		
1904			Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157-A	(absent)		
1905			Bluff77-A	Gerard's Steam Tile Works			157-A	(absent)		
1906			-	-			157-A	(absent)		

地番表記は、数字だけのものは山下町の番地を、Bluffが付くものは山手町の番地を指す。

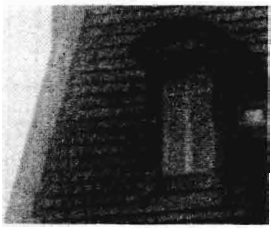


ヨーロッパの各種瓦
"Treatise on Ceramic Industries" (1901) 掲載



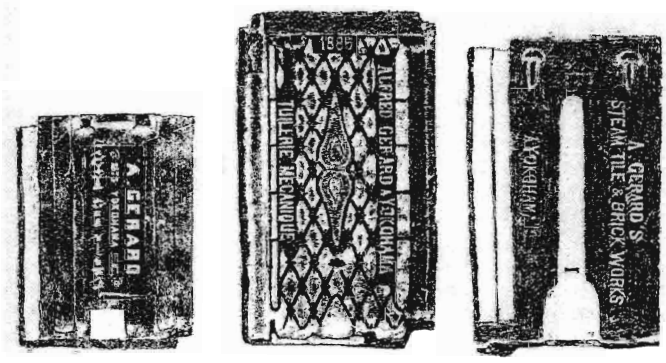
フランス瓦の葺き方
"Treatise on Ceramic Industries" (1901) 掲載

ゲーテ座（1885年）
横浜開港資料館所蔵

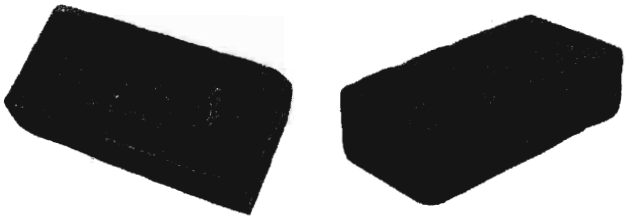


屋根部分拡大

事務所と工場の所在地　下図：明治39年地形図

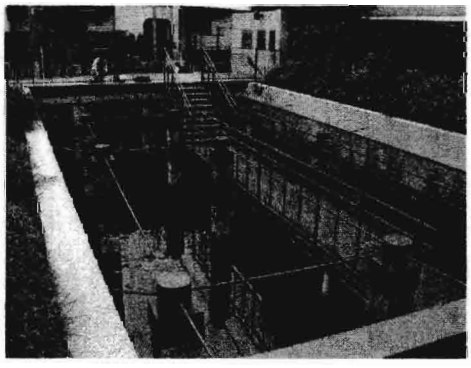


ジェラール瓦（裏面）　左からⅠ型・Ⅱ型・Ⅲ型
拓本：岡本東三



ジェラール煉瓦

地下貯水槽（上部）

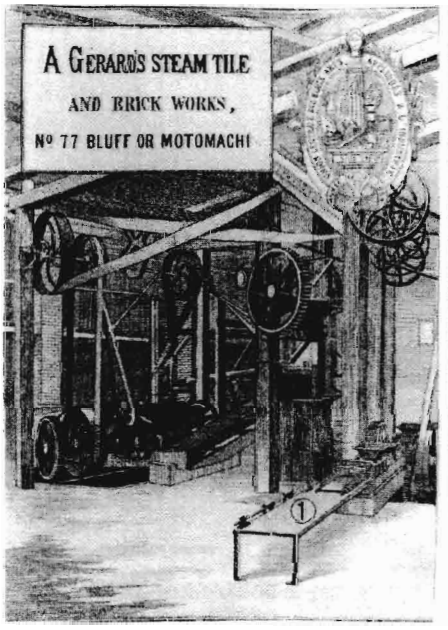


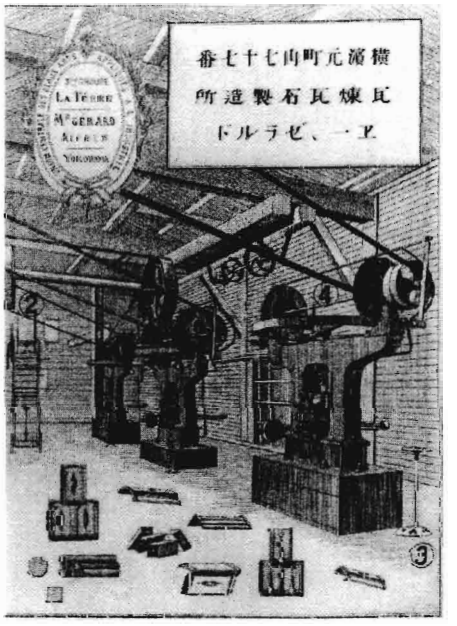
地下貯水槽（下部）

現在の元町公園

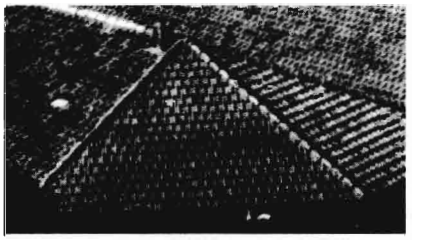
明治初期の居留地遠景　枠線内がジェラール工場
横浜開港資料館所蔵

明治中期のジェラール工場　横浜開港資料館所蔵



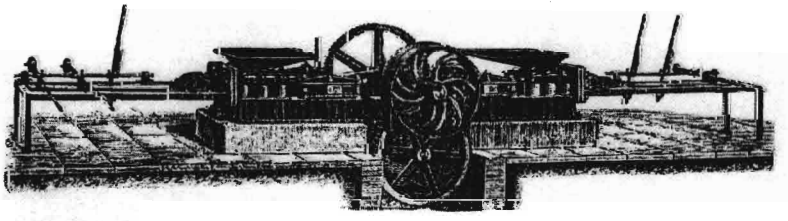


ジェラール工場の内部
『日本絵入商人録』（1886年）　横浜開港資料館所蔵

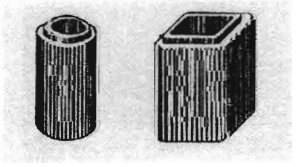


屋根部分拡大

ジェラール工場外観　同左

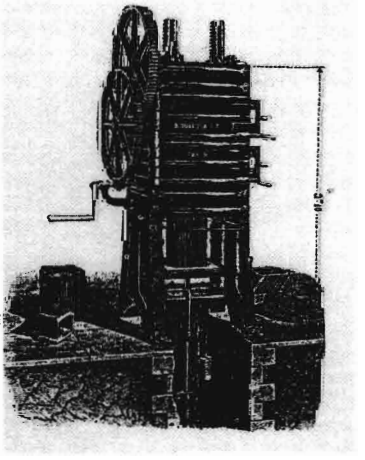


①下地成形機

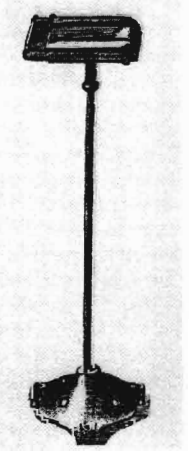


溝入り土管

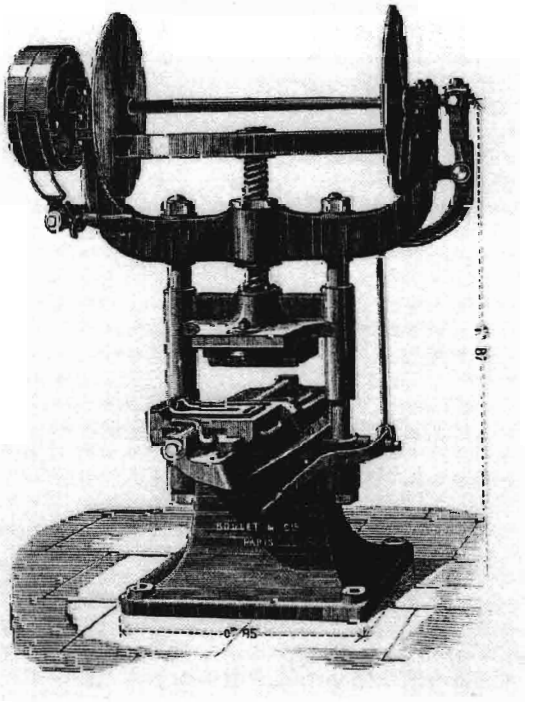
"Treatise on Ceramic Industries"(1901)掲載



②土管成形機



③回転台



④プレス機

A. GERARD'S
STEAM
TILE AND BRICK WORKS,
HONMURA, YOKOHAMA.

THE MANUFACTURE of FRENCH TILES in Yokohama having been successfully established, and in operation for several years past, fraudulent imitations (but of very inferior quality) are being palmed off on purchasers as genuine. The public is therefore warned against buying the spurious hand-made tiles, fraudulently marked with the name of "A. GERARD," and are requested to

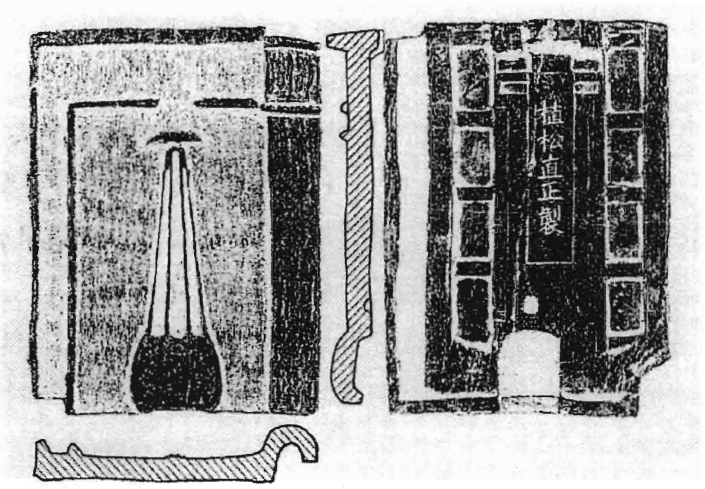
PURCHASE DIRECT
AT THE
Sole Manufactory in Yokohama,
OR AT THE
Office of the Undersigned.

By this means they will insure the genuine article, made by expensive and powerful machinery, expressly imported from France for the purpose.

Prices may be ascertained at the Works, where samples of the Tile, Brick, and other fictile productions may be seen; or at the Office of the undersigned.

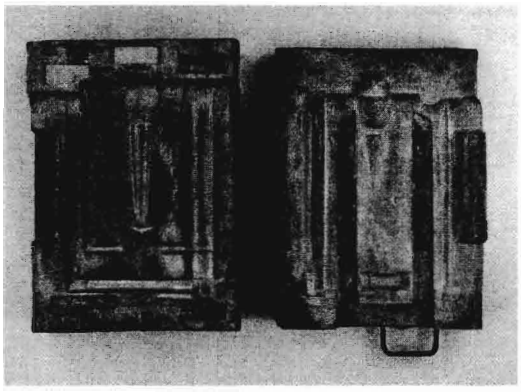
J. REYNAUD,
No. 157.
Yokohama, Sept. 4, 1880. tf

「偽物注意」の広告
"The Japan Daily Herald"
(1880年9月4日)

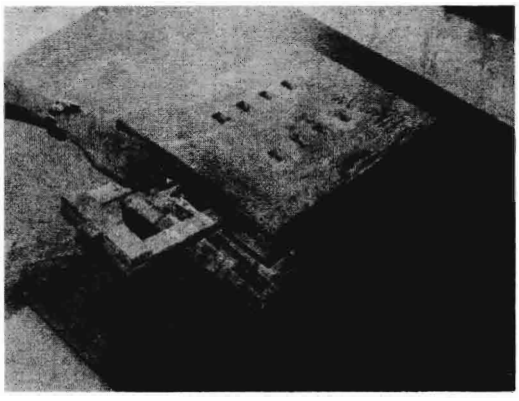


模倣ジェラール瓦
拓本：岡本東三

屋根に葺かれた模倣瓦
(旧柳下家住宅)

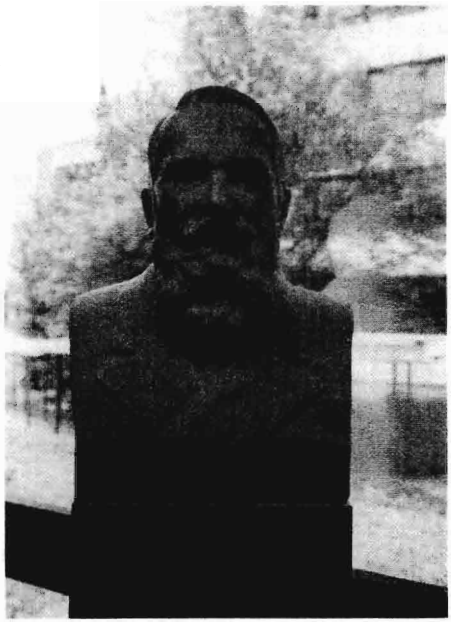


木製押型　植竹家所蔵



押型と二股

(上) ジェラール墓所
(左) 石棺に刻まれた
来日・離日年月日



ジェラール胸像
ランス農業会館図書館内

神奈川県考古学会の考古学講座

	年	課題名	
1	1994	横穴墓の謎	川崎市民ミュージアム
2	1995	かながわの古代集落	かながわ県民センター
3	1996	かながわの縄文文化の起源を探る	かながわ県民センター
4	1997	かながわの弥生時代の社会　弥生後期の集落から考える	
5	1998	神奈川の古墳　その出現と展開	かながわ県民センター
6	1999	縄文ムラの風景	川崎市高津区
7	2000	かながわの古代寺院	かながわ県民センター
8	2001	旧石器研究の到達点	かながわ県民センター
9	2002	かながわの中世～鎌倉から小田原へ～	かながわ県民センター
10	2003	学史に学ぶ　学史を踏まえた最新の研究	かながわ県民センター
11	2004	考古から近世・近代へのアプローチ	かながわ県民センター
12	2005	神奈川の横穴墓	かながわ県民センター
13	2006	神奈川の城館跡	かながわ県民センター
14	2006	古代遺跡再発見	かながわ県民センター
15	2008	新神奈川・新弥生論	かながわ県民センター
16	2009	貝塚とは何か	横浜市歴史博物館
17	2010	かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る	横浜市歴史博物館
18	2011	神奈川県の考古学・最近の動向（20 周年事業）	横浜市歴史博物館
19	2012	災害と考古学	川崎市民ミュージアム
20	2013	文明開化の考古学	横浜市歴史博物館